

～「高・清フレンドリー古道」～

第6巻

共通的補完資料

「高・清フレンドリー古道」域の調査報告に係り、挙げれば切りはないが、遠因的・周辺のなことを関連する参考資料として添付する。なお、文責を担った者の認識であり、かつ、学問的・学術的な難解なものではないことを断って置く。

整理番号	表題（件名）	備考
第6巻－（1）	<small>さじょううげ</small> 「左上右下」	三次元空間、左右・上下・前後（表裏）のこと
第6巻－（2）	反転（前後と裏表）	
第6巻－（3）	『九十六』の意味合い	本域に表出した数値（数理）のこと
第6巻－（4）	『三十六』の意味合い	
第6巻－（5）	「旧跡神躰明鏡」を成した聖数	
第6巻－（6）	「(弥勒仏)丁石順礼古道」の地形的因縁果	
第6巻－（7）	<small>ちょういしみち</small> 高野山の町石道	日本の代表的町石（丁石）のこと
第6巻－（8）	子供達の神仏と向き合う感性	神仏を区別しない感性のこと
第6巻－（9）	石造文化財から学ぶこと	「石」に秘められた事情のこと
第6巻－（10）	調査報告書執筆中の雑感	思いのほど

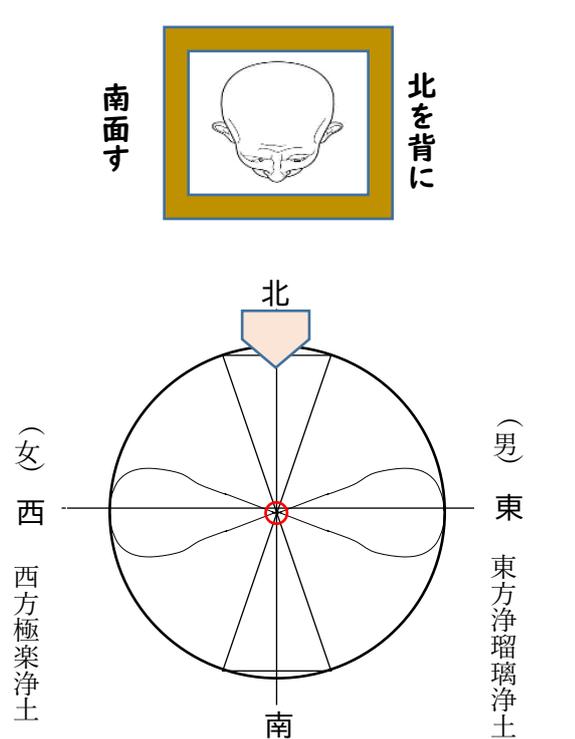
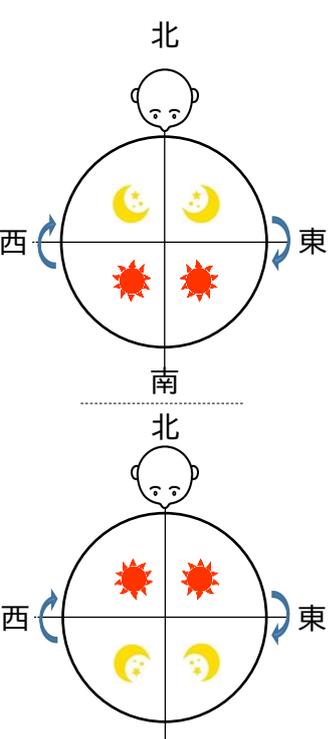
第6巻－(1) 「左上右下」

中国伝来の思想が日本仕様に融合し、日本文化に様々な影響を及ぼしたとされる「左上右下」思想を取り上げる。「左上右下」を「左尊右卑」という人もいるようだが、左上右下の根源的思想——宇宙の自然法則「陰陽二元相対(待)性原理」を踏まえれば、対比的であっても、本来は差別的・優劣的な上下を意図したものではないはずである。しかし、・・・。

第I部 基本のこと

1. 「北を背に南面す」

元々は中国の古代思想や政治哲学に由来する「天帝(天子、君子)は北辰(北極星)に座して南面す」にある。まずは二人の識者の一説を取り上げて図(表)－1に記載する。日本文化は、日本の古層にあった東西軸神聖視の思想に、陰陽五行思想等中国文化の影響下、南北軸思想を交差させた意義付けが図られ、統治機構に活かして来たという歴史があり、これらを概念図化したものである。

<p>民俗学者の吉野裕子著「隠された神々(河出文庫)」等より</p>	<p>宗教学者の山折哲雄著「新・四国遍路」(PHP新書)等より</p>
<p>天中不動の星、北極星を中心とする部分(北斗七星を含めた所)を中宮と称し、特に北極星を神靈化して最高の天神「天帝・太極・太一・太子・天子」と称した。したがって、天帝太一というのは北極星を背負って南を向き政治を行うのが一番良い(安定する)とされて、南北・垂直軸が重要視されて来た。</p>	<p>日本は農耕社会ですから『太陽』と『月』の恵みを中心に世の中を考え、統治するという仕組みが出来ていた。そのため、東西の軸を大切にした。一方、中国大陸では、天帝(天使)というのは北極星を背負い、よって南を向いて政治をするとして、北極星を中心とした南北の軸に基づく世界観が優勢であった。</p>
<p style="text-align: center;">(A)</p> 	<p style="text-align: center;">(B)</p>  <p style="text-align: center;">(C)</p> <p>太陽は東から上って西に沈む、沈むとは籠るとも言える、その籠るとは今度は東へ上るための休息(翌日活動に備えてエネルギーを熟成すること)である。また、日中の太陽は夜には月に変化して夜を統べるとも言い換えられる。太一(太極)は北を背にして宇宙を見ているということ、消長循環(エネルギーの蓄蔵と放出)の統御・差配を担っているのだ、とも見做せる。</p>

⑧の上下二つの意味合いは、太陽が出ている時は月は隠れ、月が出ている時は太陽が隠れているということ対照化したもの。あるいは、回転の動を重ねた静に等価転換したものともいえる。太陽は東から上って西に沈むことから、ジェンダー性では、種を運ぶ男を東に、その種を待ち受ける畑の女を西に配当している。⑧の上下二つの図柄を重ねてイメージすると、太陽は太陰に、逆に太陰は太陽に入れ替わるということは陰陽の重なり・交感交合に結び付いて行くことになる。

北を背に南側を向いて座れば、太陽が昇る東面は皇帝から見て左側、太陽が沈む西面は皇帝から見て右側となることから、登る（左手の東方角）＝左上（は陽）、沈む（右手の西方角）＝右下（は陰）の相待（対）関係が生まれた。生んだというのが正しいのだろう。

しかし、本来、東西南北の方角に優劣はないのだから、東西軸重要視と言っても東西に優劣はない、南北軸重要視と言っても南北に優劣はないのであるが、文明が開かれる過程において人間が「もの・こと」に意味付けを図る中で、意味分節に優劣の序列を付加・付与して来たものであろう。

図(表)－1

関連して星信仰が気になる、**前**北極星・北斗七星を神格化した妙見菩薩信仰との関係、若き日の空海が修した虚空蔵求聞持法において重要視した**後**金星——明け方に東の空に輝く時は「明けの明星・啓明」、夕方に西の空に輝く時は「宵の明星・長庚」——を神格化した虚空蔵菩薩信仰と関係もあるように見える。

フリー百科事典『ウィキペディア』より	真言宗御室派総本山仁和寺 HP より
 <p>亀に乗る妙見菩薩 『仏像図彙』より</p>	 <p>虚空蔵菩薩</p>
図－2	

図－2、それぞれの像容は他にも様々な形があり一定していないということだが、右手に錫杖・剣らしきものを、左手に宝珠らしきものを持っている状態は共通する。するとこの状況は地藏菩薩像とも酷似していることになる。そこで、「北を背に南面すと星信仰」という状況と合わせ鑑みれば、「高・清フレンドリー古道」域「来名戸神」においては地藏菩薩というよりも、妙見信仰と結び付いた妙見菩薩、あるいは虚空蔵菩薩を模したものではないか？ とも思うようになった、果たして、奉納者は何を意図したのだろうか。

なお、北極星を背にすることに着目しようが、里において北極星に向かうことに着目しようが、いずれにしても、妙見信仰に繋がるものを思う。

どのような事情があったのか、今となってはどれが正しいのかは断定出来ないが、推理・想像においてはとても興味深くなる。

2. 中国神話の「伏羲と女媧」

銀河系の宇宙を形作った設計者は、伏羲（男神）と女媧（女神）によると云えている。図－3 ab は、天理大学附属天理参考館のサイトから拝借したもの。中国・新疆ウイグル自治区トルファンのアスターナ古墓から出土した「絹本着色伏羲女媧図」——1300年以上前の絹絵である。同 a は原図だが、傷みが激

しいために模写的アレンジしたのが同bである。
 同図に向かって右側（当人からは左側）は伏羲(ふくぎ/陽)、左側（当人からは右側）は女媧(じょか/陰)という。上半身が人間、下半身が蛇身で互いに尾をねじって絡み合わせる姿を以ってしめ縄状で表現されている。なお、ネットには同図cのように様々なものが載っている。二神の頭上には太陽（日）と思われる天体があり、蛇尾の間には月（太陰）と考えられる天体も描かれている、それらの周囲には星と考えられる小円が並び、北辰（北極星や北斗七星）と思える星も表現されている。



図-3a



図-3b



図-3c

3. 「日と月」の初め

中国古典『淮南子』には、北極星を神霊化した最高神の太極（太一）は宇宙創成を担い、軽い澄んだ陽気を集積して『火』とし、その火の精が太陽（日）となった。重く濁った陰気を集積して『水』とし、その水の精は太陰（月）となった。天上ではその日と月の陰陽が混交・組み合わせられて木火土金水の五惑星が生まれ、地上では木火土金水の五元素（五行）が生まれた、とある。

『易経 繫辞伝（下）』には、「日往けば月来たり、月往けば日来たる。「日・月」相推して明生ず。」（昼の明かりは日が担い、夜の明かりは月が担う。）とある。

なお、月に「朔（欠け）望（満ち）」がある、本当は『月』自身は発光している訳ではなく、太陽『日』の光を受けている、反射しているものである——彼光体であり、反射体である——が、古代人にとっては、明るさを認識した時は、月自ら発光しているものと見えていたことであろう。

4. 吾が国神話における国生み

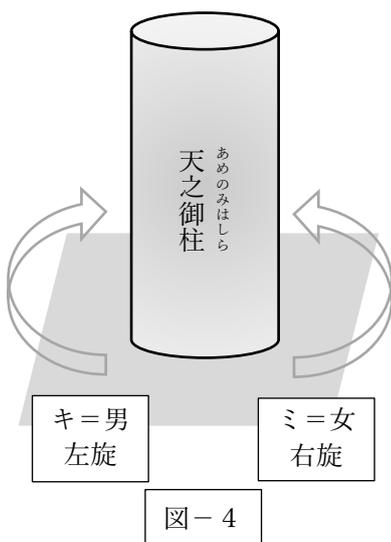


図-4

吾が国の記紀神話における国生みは、伊邪那岐命（男神）と伊邪那美命（女神）がオノゴロ島に降り立ち、天の御柱の下で国生みをする際の儀礼において、同柱を回る左右の方向と、言葉を掛け合う順番が問題になっていたとしている。初め（先）に女神であるイザナミから男神のイザナキに声をかけたら、不具の子ヒルコに生まれたため、葦船に入れられオノゴロ島から流してしまう。今度は逆に、男（夫）が先に声をかけて、女（妻）が後に随ったら上手くいったという。図-4はそのイメージであるが、柱に抱き付く姿勢なのか、柱に背を向ける姿勢なのかの問題意識である。記紀には明確な描写はないが、柱を巡るということから視線を柱の方に向ける、つまり柱を視界に入れながら回ることが一般的な見方という。二つの命題がある。一つ目は回る向きで、男は左旋（陽）、女は右旋（陰）を正統

化している。二つ目は声掛けの順番で、先に男、後に女を正統化している、いわゆる「夫唱婦随」である。もちろん、陰陽二元対応となっている、左=陽・先=男、右=陰・後=女の配当である。

5. 吾が国神話における三貴子

図-5 a、そのイザナギとイザナミが国生みの後に生んだ神々について、**左目（陽）**から生まれた天照大御神と、**右目（陰）**から生まれた月読命に、間の鼻から生まれた須佐之男命を加えた三貴子の登場を華々しく物語っている、その後の歴史上では、天照大御神は仏教の大日如来と習合するなど至る処に登場するものの、月読命は後の展開に殆ど登場しない、しかし、民間信仰・民俗においてはきちんと重要視されて来た。（記紀の中では入り組んでいる処はあるが・・・） **天照大神は昼と大地——（陽）**を統べ、**月読命は夜と海原——（陰）**を統べよとなった。神様の左右両眼から生まれた日と月は、天体神格化の象徴でもあり、まさしく天空の両眼と見做される。

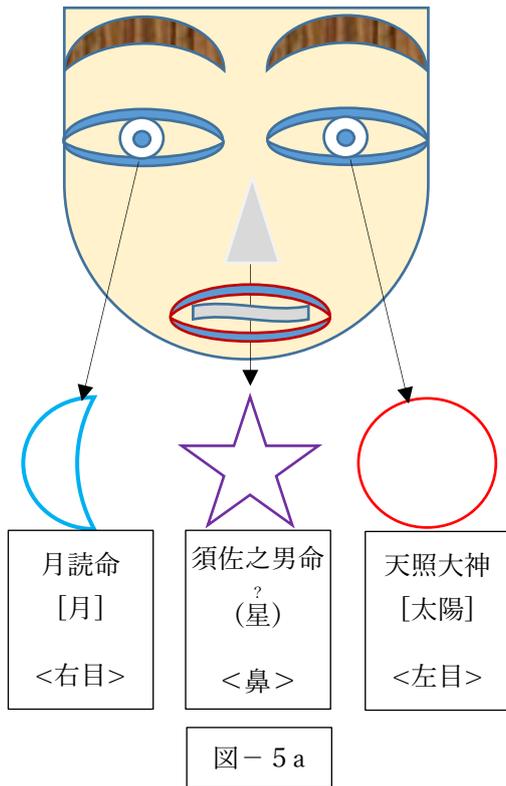


図-5 bc、戸矢学著「ツクヨミ 秘された神」（河出書房新社）を参考に、三貴子と言え、皇統の証であり、かつ、日本国最高峰（究極）の宝物である三種の神器を体現している、両者（三貴子と神器）は表裏一体の関係にあり、対応関係は同 b のとおりである。同 c はウィキペディア（Wikipedia）よりは拝借したもので想像図とある。その根拠は記紀にあるとされるが、諸説あるようだ。**勾玉は三日月の形象に酷似する**、上下左右反転させて突き合わせると同図 d のようになり、陰陽二元魚眼太極図と重なる。

宮中においては三種の神器を奉斎しているが、今ある鏡と剣は代用品で、勾玉のみが実物とされて有史以来天皇の傍に保管されて来たという。それほど大事にされて来た、とりわけ**勾玉と一体の月読命は月山の祭神として崇め祀られて来た**のである。すると、記紀においては後の展開に殆ど登場しない月読命は、天皇皇統の象徴三種の神器の一つに入っていることは面目躍如という気がする。

		月読命	須佐之男命	天照大神	三貴子
		八尺瓊勾玉 <small>やさかにのまがたま</small>	草薙剣 <small>くさなぎのつるぎ</small>	八咫鏡 <small>やたのかがみ</small>	三種の神器
		宮中	熱田神宮	皇大神宮 (伊勢の内宮)	所在(奉斎個所)
図(表)-5 d	図(表)-5 c	図(表)-5 b			

6. 「天円地方」

その1；前記図-3において、本体における左側の伏羲・男は左手に「矩（曲尺）」を持ち、右側の女媧・女は右手に「規（コンパス）」を持つ姿で出会った。「矩（曲尺）」は正確な正方形（・・・四角・方形）を、規（コンパス）」は正確な円形（・・・円弧・曲線）を描く際に不可欠な道具であり、測量技術に最小限必要な道具と重なる。

夫婦は相和合し、その道具を以って、下の四角の大地（陰）と上の丸い天球（陽）とを創造した。そこから宇宙は「天円地方」と言われるようになった。「もの・こと」の調和を維持していく権能を象徴していると云われている。円形と方形（四角）に係る内接と外接の関係図は図-6のとおりに通有り得る。両者は別々に意味合いを為したり、合わせて意味合いを為したりする。地球は丸い訳だが、あくまでも大地（区画された土地、大地の土地は四点を以って形作られ、区画されてそこに価値を持つ）という見方である。逆に、上の天を象徴するものに円形を当て、下の地を象徴するものに四角を当てた、とも言える。

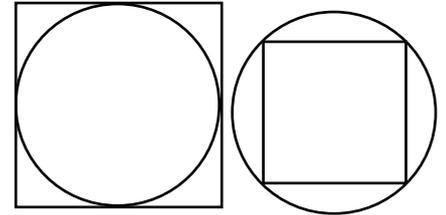


図-6

その2；伏羲と女媧の関係性を再掲するが、陽の男が（前）サシガネ・矩（かねじゃく）を持ち、『方・四角□』の機能を使って地を設計し、陰の女が（後）コンパス・規（ぶんまわし）を持ち、『円・丸○』の機能を使って天を設計したことになっている。このことと陰陽二元基本形とを対比的に図(表)-7のとおりに記述する。

二元 基本観	二元 性	陽 (A)		陰 (B)	
		男		女	
ふくぎ 伏羲 と じよか 女媧	—	ふくぎ 伏羲 (男)		じよか 女媧 (女)	
	道具	(陰相)	サシガネ	コンパス	(陽相)
	幾何		方・四角□	円・丸○	
	宇宙		地	天	
	空間識別		(下)	(上)	
---		C		D	

図(表)-7

以下は私説（持論）である。根本二元の陽（A）はCにおいては陰相を示し、根本二元の陰（B）はDにおいては陽相を示し交差している、矛盾（対立）していると見られる。しかし、これは陰陽二元の自然原理を表している。幾何の円（陽）も四角（陰）も元を正せば直線である。また、図-3の下半身のねじれ状のものも元を正せば直線である。この場合の直線は陰陽に属さない、陰陽合一の中生物の意味合いである。また、ねじれは180度反転、つまり、陽⇒陰（および陰⇒陽）の交換を意味する。

このことから、陰の女媧(女)には反対の陽を象徴する天（円・丸○）を描くコンパスを持たせ、陽の伏羲(男)には反対の陰を象徴する地（方・四角□）を描くサシガネを持たせて、あえて（意図的に）陰陽交換を演出したものであり、すなわち、陰陽交合を経て、以って、原初の天は陽に収まり、地は陰に収まり、男女はそれぞれの陽と陰に収まり、それぞれの機能を発揮し二元は調和を図るものであるという訓えを表現したものと思っている。要は「陰中陽あり、陽中陰あり」の陰陽二元説を奥深い巧妙な仕掛けを

以って組み込んでいると感嘆している。

形との関連から見る。あらゆる物の形は大きくは曲線的なものと直線的なものに分類出来る。さらに基本形としては、三角形（正三角形）、四角形（正方形）、円形（丸）の3つである。三角形はいろんな処に登場するが、天地開闢・天地創造における説明要素としては円形と四角が最も適切であるとなったのだろう。円形は天球の円球と同相同価である、四角形は大地の立方体と同相同価である。

関連で宇宙創成に係る老子には有名な一説、「道は一に始まるも、一にしては生ぜず。故に分かれて陰陽と為り、陰陽和合して万物を生ず。故に曰く、一（一）は二（陰陽）を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。」とある。よって、三角形は万物生成の胎動基点であって、生成された万物の最初は四角形ということになる。それからの化育生成は五角形、六角形・・・無限形に発展するが、無限形は円形である。ここに天地を持ち出し、よって最下部の地（四角形）と最上部の天（円形）が当てはまったということではないかとも想像している。

第Ⅱ部 「左上右下」思想と日月の実際例

その1；図-8は「<https://www.wikiwand.com/ja>」より拝借した天皇礼服のこと。孝明天皇（明治天

皇の父）の袞衣、あるいは、こんいという。これは天皇の最高祭服で、前側、左右の肩に日月が、背中側首の所（後ろ衿の下）には北斗七星（星辰）が大きくはっきりと描かれている。天皇即位の儀礼や大嘗祭は天皇の王権を象徴する代表的な儀礼であるが、その場（時）に限って着用されたものである。着用する天皇は北極星の身（立場）で、前面の頭に近い方に宇宙の両眼なる「日（三本足鳥／背景は赤色）」を左肩に、「月（蟾蜍と兎／背景は白色）」を右肩に、後面（背面）で頭に近い方に北斗七星を背負う形となる。なお、この日・月・星辰三体の意味合いは「照臨無私」で、照臨とは、太陽や月が下界を照らす意から、

- ・神仏が人々を見守ること（照覧）
 - ・君主が国土・人民を統治すること（君臨）
- などの意味であるとされる。

したがって、私心無く、無償の愛を以って国土・人民を統治することの意を表現している。なお、元は中国皇帝の専用漢服、礼服の一種で「天子御礼服」とも称される、配置された文様は、細部について日本風にアレンジしているという。

その2；わが国において国家法典が完備したのは701(大宝元)年、大宝律令の完成による、律は刑法、令は行政法を意味する。その体制（行政組織）を太政官といい、最高官職を「太政大臣」（今の内閣総理大臣）とし、その次に「左大臣、その次に「右大臣」を配置した。なお、太政大臣に適任者がいないと空



図-8

席でもよいという職だったため、実質的には、**左大臣が最高役職**であり、右大臣は補佐的な役目（今の副総理）であった。このようなことから**左大臣が上、右大臣は下の格が慣例（習慣）化**した。

その3；寺院においては、図-9aのとおり、仏の守護神たる仁王像は、本体から見て**左側に「阿（陽）像／言葉の初め」、右側に「吽（陰）像／言葉の終わり」**が配置されている。神社においても、同図bのとおり、守護神たる狛犬は、本体から見て**左側に「阿（陽）像」、右側に「吽（陰）像」**が配置される。

その4；図-10の庚申信仰の掛け軸を紹介する。私の町内会の知人宅に伝わる物である。ここに



図-9a



図-9b



図-10



図-11

においても頭部に宇宙の両眼「**日と月**」を配している。本尊から見て**左上に日、右上に月の配置**である。

その5；また、類似の関連で、湯殿山信仰に係る掛け軸で次の物も珍しいとされていることから図-11を紹介する。同図は、山形県西川町旧本道寺（真言宗）門前集落の元宿坊「**一明坊**」に伝わる（所蔵の）門外不出のものである。最下段に弘法大師自らが彫刻したと記述された「南無阿弥陀佛」の刷り物の掛け軸である。最上部**左右に「日と月」**を配している。

その6；図-12は、自宅から直線距離120mほどの場所にある「（宗）月山神社」（祭神は月読命）境内にある献灯である。燈明（ローソク）を立てる穴の両側には、各柱に、日と月をモチーフにした彫り細工が施されている。**神殿から見て左に日、右に月である。**

その7；薬師三尊のこと、薬師如来を中尊とし、本体の**左脇侍に日光菩薩**を、**右脇侍に月光菩薩**を従える三尊形式である。根拠は「薬師瑠璃光如来本



図-12a；月は西面



図-12b；日は東面

願功德経」、通称「薬師経」である。有名なのは図-13のとおり奈良「薬師寺」のものである。

その8；山形市岩波地区の石行寺境内に図-14のとおり「宇賀神」と刻された石祠がある。これにも祠の中の神から見て左に日輪を、右に月輪を彫刻している。



図-13

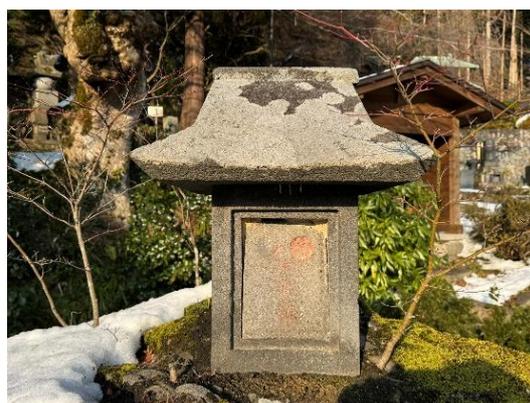


図-14



その9；密教曼荼羅絵図の掲示の仕方を取り上げる。寺院本堂内に垂下掲示する場合の向きは図-15aが標準形である。参加者が寺院の本尊に向いた場合に東側・右手に胎蔵界を、反対側の西側・左手に金剛界を垂下する。本尊から見ては、左手に胎蔵界を、右手に金剛界を配置する。難解なことはさておいて確認しておくことがある。胎蔵界は密教の根本的思想・教義を成す大日経に依って立ち、金剛界は密教における実践面を重要視する金剛頂経に依って立つものである。大角修著「大日経 金剛頂経」（講談社学術文庫）P15には「・・・大日経と金剛頂経は、大日如来（大日尊）が姿を現し、金剛薩埵（金剛尊）という菩薩に直接に言葉をかけて教えを説くという内容である。・・・」教師（大日）と生徒（金剛）の関係にも見える。どちらが上位かという優劣は一概には言えないのは当然としても、諸本に目を通した私の印象では、より重要視の面では胎蔵界ではないのかと考えている。なお、同図bはaを南北反転して見たものである。

他にもたくさんの適用事例がありここで閉めることとする。

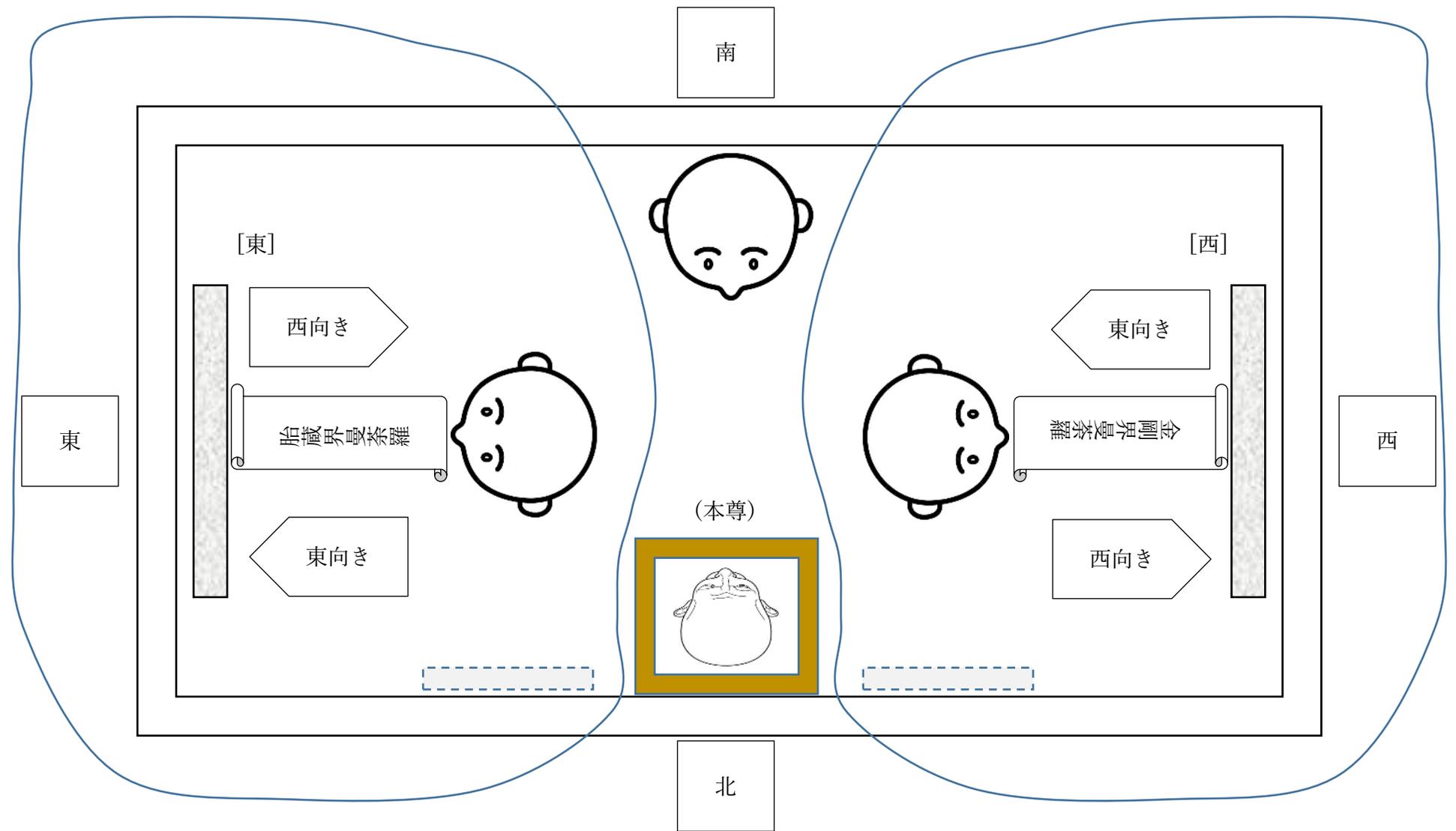


図-15a

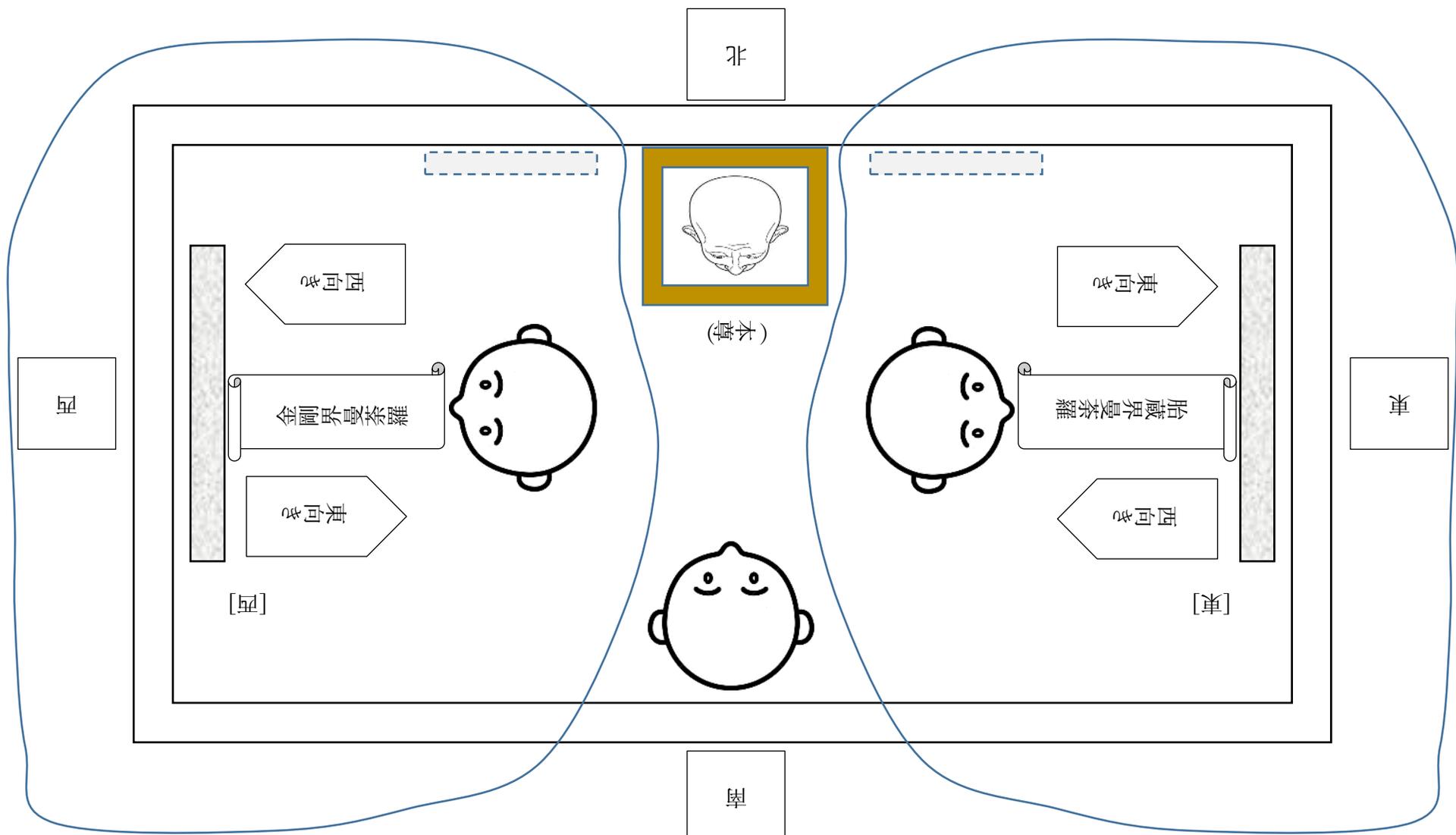


図-15b

[関 連]

さて、左上右下のことから少し外れるが、日月並立のこと、古文書や石碑などに、あるいは諸行事において、「^{てんげわじゆん}天下和順、あるいは、^{にちがつしょうみょう}日月清明」の言葉を多々使って来たがその意味合いについて浄土宗大辞典 WEB サイトから図(表)－16 に取上げる。阿弥陀仏信仰を説く浄土三部経のうちの「無量寿経」の一節にあり、^{しゆくしょうもん}祝聖文という偈文で慶事（お祝い事）に用いる御経である。逆説的に言えば、一人ひとりが^{しゅうとくこうにん}崇徳興仁 ^{むしゅらいじょう}務修礼讓を実践すれば、天下泰平の世の中になるという。中国古典「礼記」大学にある「^{しゅうしんせいかけこくへいてんか}修身齐家治国平天下」にも通じる訓えを感じる。

^{てんげわじゆん} 天下和順 ^{にちがつしょうみょう} 日月清明 ^{ふうういじ} 風雨以時 ^{さいれいふき} 災厲不起	^{こくぶみんなん} 国豊民安 ^{ひょうがむゆう} 兵戈無用 ^{しゅうとくこうにん} 崇徳興仁 ^{むしゅらいじょう} 務修礼讓
天下和順し、日月清明なり、風雨時を以って、災厲（災害と疫病）起こらない、そうなれば、	国豊かに、 ^{たみ} 民安んじ、兵戈用いることなし、徳を ^{あが} 崇め仁を興し、務めて礼讓を修すべし
^{ぜんかだ} 前伽陀	^{ごばい} 後唄
（仏様の赴くところは）天下は泰平となり、太陽も月も清らかに輝き、時季よく雨が降り、程よく風が吹き、災害や疫病も起こらない。国は豊かに栄え、民の暮らしは安らかとなり、武力を行使することもない。（人々は他人との違いを認め合い）他人の善いところを尊び、互いに思いやりながら、努めて礼儀正しく振る舞い、また譲り合うものである。	
図(表)－16	

図－17 は、市村幸夫さんより拝借した資料である。同図 a は飯塚村（現山形市）の岩田家に伝わる吉左衛門（休造）の日本廻国（六十六部）満願成就に係る紅花染 幟旗（^{のぼり} 幟 ^{はた} 旗）である、また、同図 b その満願を踏まえた供養塔石碑であり、「天下和順・日月清明」がしっかり書かれている。天下の和順はそもそも日月の清らかな明かりが齎すもの、という報恩感謝の日月信仰が基層に流れている。



図－17a

図－17b

以上に共通するのは、本尊・本体から見て左側に日（太陽）・陽を、右側に月（太陰）・陰を配置していることであり、初源を辿れば陰陽二元相対（待）性原理である。これらから分かるように、左上右下とはいうものの、左は右があつてのこと・右なくして左はなし、上は下があつてのこと・下なくして上はな

し、並べて比較したが故に生ずる相対配置であって、陰陽二元の発展系であることから、左右・上下において本質に差異はないのである、統合的調和の観点からは必要な相補関係にあるものなのだ。相補関係とは、世の中のあらゆる事象の「もの・こと」のどちらか一方に陰（あるいは陽）を配当すれば、他方に陽（あるいは陰）が、つまり、反対相が自動的に自生・自発し、以って、如何なる条件下であっても陰陽が瞬時に両立することからは、その陰陽に価値の優劣は判定・断定できない、勝負は永遠に付かないという教訓が読み取れる。

ところで、月は自ら発光せず太陽から光を受け貰って反射しているに過ぎない、しかし、月は“俺に光をもっと強く当てよ”とか、“24時間ずっと輝かせよ”とか、“立場を入れ替えよ”などという愚痴は言わない。万葉集等において「月」が「日」よりも頻繁に詠まれていたのは、受け身ながらも存在感を少しでも覗かせるといふ月の持つロマンチック性や一歩引いた奥ゆかしさのイメージは日本人の気性にマッチするからであろう。私も少しばかりの自負や僅かばかりの矜持はある・・・、それをいいことに太陽になったつもりで大威張りの吾身を恥じるばかりである、自戒自戒・・・。

昔は現在のような科学的根拠を以って、天体の動きを解明出来た訳ではなかったであろうが、古今東西、老若男女問わず、天空の規則正しく摩訶不思議な諸現象にはただただ畏敬の念を持ったのはごく自然なことである。日・月は天空^{にちげつ}にあってその個性を担いつつ双方相まって——同格意識で見た——地球に対して日照降雨・風雨順時^{うるお}を潤し、ひいては五穀豊穰と子孫繁栄を育む慈愛の源泉、天地を見守る天空（宇宙）^{まなこ}の両眼として崇拜・崇敬・信仰の対象となって来たのであろう。

ところで、上記のとおり「満ちては欠ける、欠けては満ちる」月（太陰）は日陰の存在ではあるが、人生訓にはとても重宝な存在である。

「満ちては欠ける」⇒

成功し絶好調は永遠ではなく、やがては衰退して行くものである。
増上慢・傲慢は、まもなく（やがては）凋落するものだ。

「欠けては満ちる」⇒

失敗し意気消沈しても永遠ではなく、やがては成功のチャンスは来る。
謙虚、自戒・自省を心底念ずれば、必ずや他者承認を得られるものだ

陰陽（功罪）両面があるからこそに希望と期待が生まれるものである。

(end)

第6巻－（2） 反転（前後と裏表）

「左上（陽）右下（陰）」について別記したことから、ここでは「前（陽）・後（陰）」と「裏（陰）・表（陽）」を取り上げる。

1. 「前後」

図－1参照のこと。対の前後となれば鏡像である。鏡像の物理的説明は難解な処があるが、株式会社エイチ・エム・グループのHPなどを参考に私の視点を加えて整理して見た。なぜ、鏡なのか、「かがみ」から我欲・我執の『が（我）』を省くと『かみ＝神』になるという俗説と関連するからである。我欲・我執の『我』抜きは、何も神様との交渉だけではなく、仏教は仏陀の訓えでもある。

鏡の物理的な仕組みを少し簡単に説明する。物としては、光の反射を利用する事によって姿・形を映して見る道具である。鏡像の仕組みはいつでも鏡に垂直な方向が反転するという事である。この自分自身と立てる鏡の位置関係で、鏡像は次のように前後・上下・左右が反転するのである。

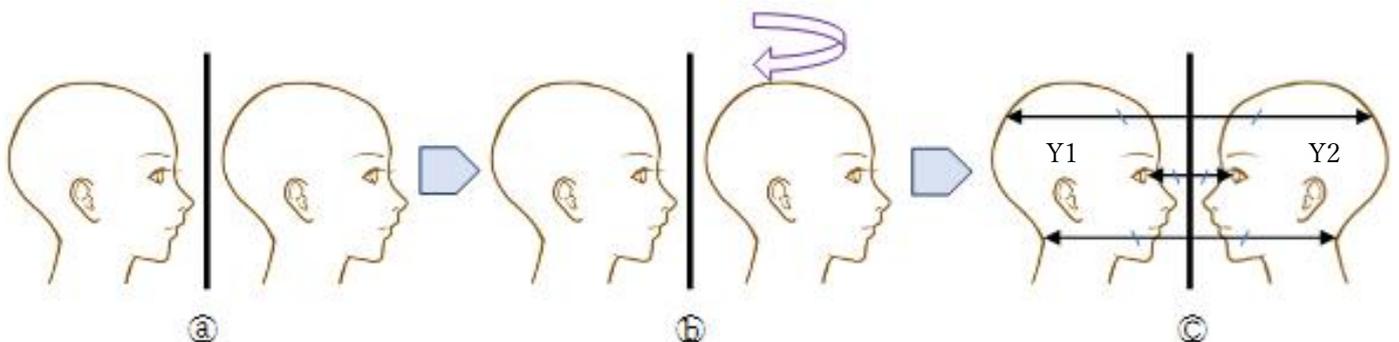
① 床（地面）に垂直に立てた鏡に向かって立った場合、私は鏡の方を見ているのに、鏡の中の私は私を見返して来る。つまり、視線の方向が全く反対でありよって前後が反転する。

② 次に、床に鏡を置いて、その上に乗れば、鏡の中の私は逆さになり上下が反転する。

③ 次に、床に垂直に立てた鏡を私の横に置くと左右が反転する。

つまり、「鏡像反転像」は、前後・上下・左右 の三つの空間の軸を考えると、そのどれか一つが反転（逆転）し、残りの二つは、そのままなのである。あるいは、鏡に垂直な方向において、各点距離が対称になるという表現でもよいかと思う。どうしてそうなるのかは、光の直進性や反射性などの物理的な特性から起こるとのことだが、理論は学者が説いているからそちらに譲る。

特に普通に鏡に向かうと左右が反転したように見えるがその理屈の一端である。①において鏡に向かった自分と同じ向きの自分を置く。次に②において鏡の中の自分を、床の水平面で180度右（左）回りに回転させる。そして、全ての部位が等距離の点を結んで像を成す（③）ということになる。すると、鏡に映った像は、鏡に向き合った物体が、反転しそのまま戻って来たと解釈出来る。ところがなぜ、左右が反対に見えるのか。自分は鏡に向かっているのに、鏡の中の人物はこちらを向くが、この像を見たときに、人間は「もし自分が向こうからこちらを見るとしたら」という無意識のうちに想像力が働く。頭脳の中で自分を回転させて逆向きにするためになるのである。通常使用する鏡の像は、逆になっているのは、左右でも上下でもなく「前後」だけが反転しているというのが正解である。例えば、右手を上げたら鏡像は左手と見えるのは錯覚、あくまでも、鏡像も右手なのである。



図－1 a

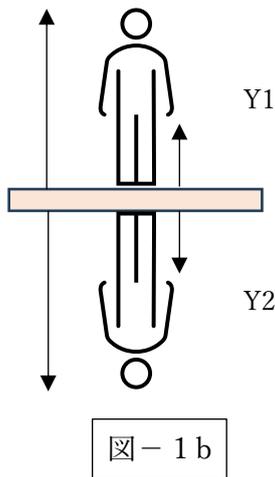


図-1b

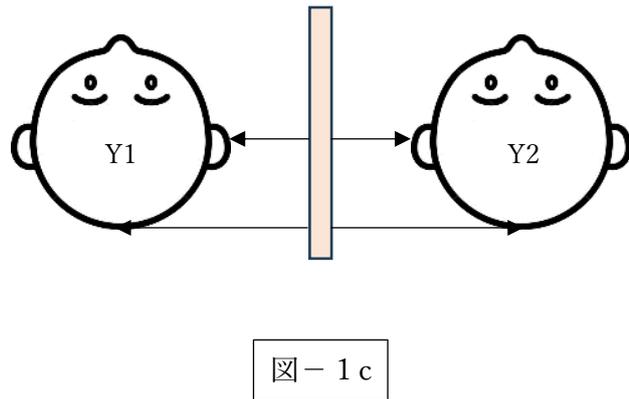


図-1c

次に右側に鏡を置いた場合は図-1bの、そして、鏡に上がった場合は図-1cのイメージとなる。

「鏡像は逆転する」という表現は、何が、どこがとなるが、鏡を境界として、像の各点距離が対称性を持って離れるというのを逆転すると言えばそれはそれとして普通に使う場合は良いのかもしれない。

2. 「裏表と表裏」

その1；出羽三山「八方七口」と言われた登拝口

江戸期には山麓に「八方七口」と言われた登拝口が存在していた。図(表)-2は「西川町史 上巻」より転用して整理したものである。(括弧)内は、明治の神仏分離以前の寺院坊である。同じ真言宗の湯殿山別当4ヶ寺の中にも「表」と「裏」を配当している。

-----	七口と旧社寺名		現在の社寺名
羽黒修験 (天台宗)	羽黒口 (寂光寺)		(廃寺)
	肘折口 (阿吽院)		(廃寺)
	岩根沢口 (日月寺)		(廃寺) 岩根沢三山神社
湯殿山別当 4ヶ寺 (真言宗)	表口 表別当	七五三掛口 (注連寺)	注連寺
		大網口 (大日坊)	大日坊
	裏口 正別当	本道寺口 (本道寺)	(廃寺) 口之宮湯殿山神社
		大井沢口 (大日寺)	(廃寺) 大井沢湯殿山神社
図(表)-2			

また、図-3はその登拝口の地理的位置関係である。

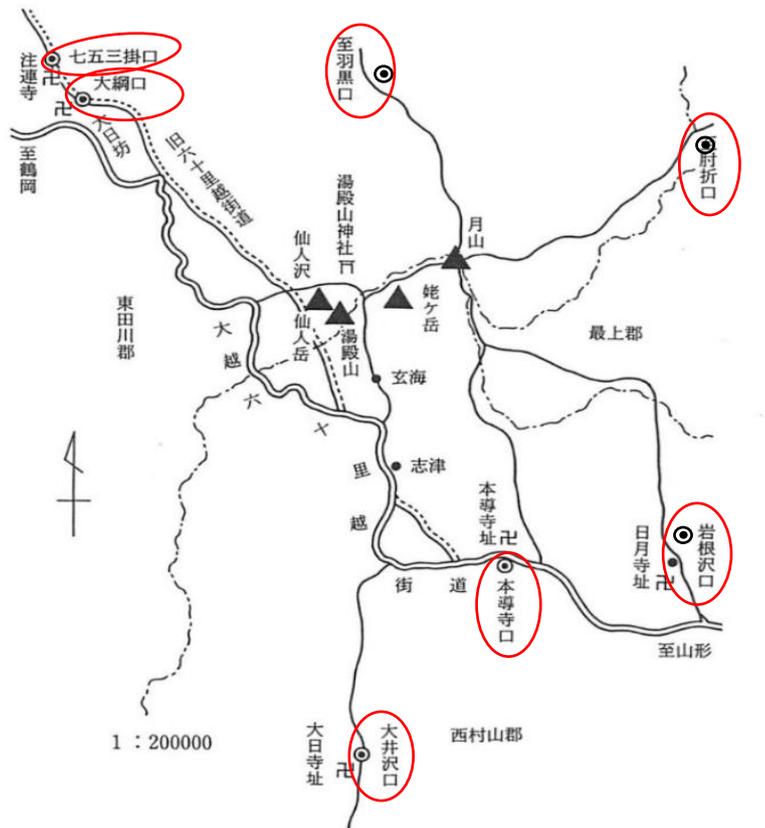


図-3

湯殿山八方七口の登拝口
(山形県総合学術調査会編集『出羽三山(月山・羽黒山・湯殿山)・葉山』)

その2；星野徳寶著「出羽三山参拝の栞」（昭和元年・三山参詣人案内所発行）の記載

「・・・羽黒口、（湯殿山口）を三山**表口**といい、・・・本道寺口と岩根沢口を**裏口**といい・・・」とある。

その3；「清川道」関係

井場英雄著「岩根沢ものがり」P30に興味深い次の記述がある。「・・・内陸から庄内に通ずる六十里越街道が、**表通り**であり、白岩から幸生に入り、間沢川、鶴部、沼の平、岩根沢、そして月山越が裏通りであったと見られる。・・・岩根沢門前先に捕り物道具の十手、刺又、捕り綱、袖がらみなどを備えた番所があったとか、また、烏川にもそうした備えがあったと聞き、何かしら裏街道の性格があり、烏川にも柵としての整備があったに違いない。」岩根沢から月山までは、高・清フレンドリー古道域のまさしく清川道である。この白岩からの道が裏街道と認識されていた時代があったということからは使用実態を想像して見た。

- ✓ 1 開山期間中に参詣者は諸々の入山料（賽銭や先達料）を免れるために裏街道を利用した。しかし、柵を設置したということでは賄賂で通れたのか。
- ✓ 2 開山期間中に、参詣者に加え、正式に入山料を徴取して鉱山関係者を通させたが、ただ信仰主体の参詣道においては裏街道と称したのか。
- ✓ 3 開山期間外（閉山中降雪前）に鉱山師（山師）や鉱夫が鉱山開発のための往来に利用させたことからは、参詣という本来目的ではないので裏街道と称したのか。

ただ、岩根沢へは六十里越街道から分岐して行かれたであろうから、その先は裏街道に合流ということになるが、山先達同行の参詣者は難なく通行可であったろう。しかし、捕り物道具まで用意したということは、時には盗賊や乱暴狼藉者が侵入していたということなのだろうか。

そういうことは考え過ぎ、六十里越街道を表通りとし、それ以外の道は対比的に裏通りと称しただけという見方もある。

その4 ; 「高清水通り」 関係

旧本道寺山門のこと、図-4a 右手下に「裏門」と書かれている。他方で同図bは明治元(1868)年九月戊辰の役で焼失した後の旧本道寺境内を中心として描いた絵図(入手先不明となった)である、左記と同じ場所を指すであろう山門を「表門」と表記している。同じものを「表」と「裏」という正反対の説明となる。私はこの違いを以前から認知していた。

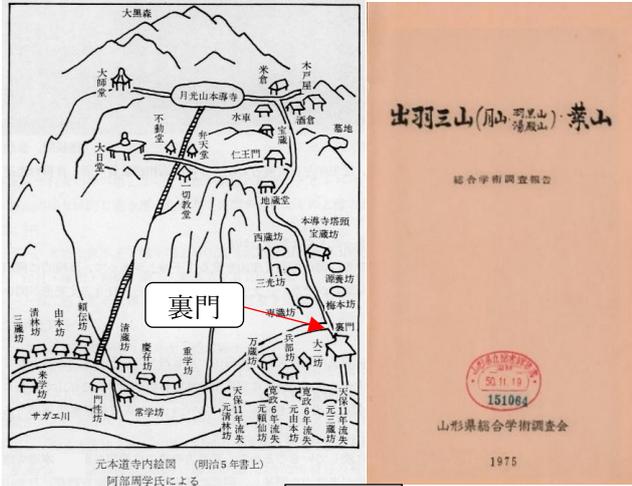


図-4 a

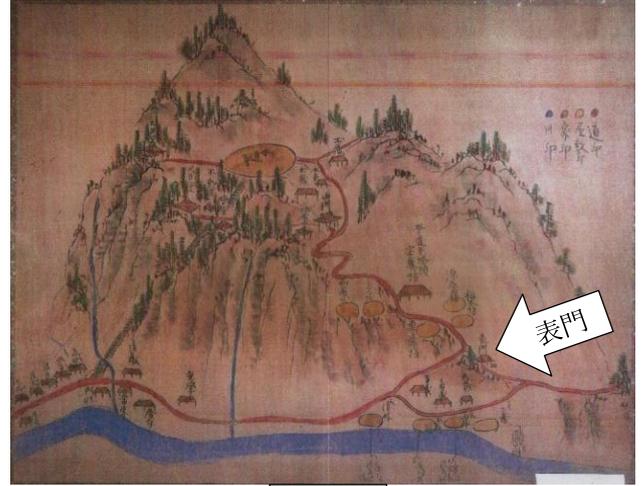


図-4 b



図-4 c



図-4 d

この門は、昔はいわば聖俗結界(境界)に設置していたものであり、西川町史編集資料第八号(四)113頁(四年六月文書)によると、元は同図dP1辺りの場所にあったものを、大正初期にP2に移設し、今は同図c(鳥居先の門)の状況にて現在に至るものである。

そこで、六十里越街道において山形側から境内(門前集落)に入る人からみれば表門であろうが、本道寺集落から見て東の方の端に近い所を見れば裏門となるかもしれない。どちらにしても間違いではないだろうが、真逆の位置付けになったのだ。世の中で伝言ゲームに似たよくある話である。現地現物を目前で共有せず、机上の議論ですれ違いから無意味な争いに至る状況が想起される。

3. 反転(反対)

第六卷-(1)「左上右下」^{さじょううげ}で取り上げたことに対する反対のことである。

その1；雛飾りのお内裏様とお雛様の並べ方については、ご存じの方が多いと思われるが、上記の背景を踏まえたのが図-5aのと通りの京風の飾り方で、関東風（同図b）は男と女が反対になっている、その理由は、明治以降の西洋文化の影響とされている。キリスト教聖書を典拠とし「使徒信条で（もしくは『は』）東を向く」といわれているようで、祈る時は東を向くことになっており、東方角を聖視する延長線上にあるという。太陽の登る東の方角を、東洋、西洋問わずあらゆる民族が重要視して来たが、図-6のとおりに対比すると、東洋は統治者の天帝（天子、君子）視座で東を見た、すると主の左手が上位となる。西洋はキリストに向かう民衆視座で東を見た、すると主の右手が上位となる。その反映であると思う。共通する東を見ると時に、為政者目線なのか、民衆目線なのかという違いから来たのだろう。

<p>「https://k-doll.co.jp/seck/hina/kantou-kansai/</p>	<p>「https://limia.jp/article/331464/」</p>
<p>(京風)</p>	<p>(関東風)</p>
<p>図-5a</p>	<p>図-5b</p>

<p>A；東洋の視座</p>	<p>B；西洋の視座</p>
<p>図-6a</p>	<p>図-6b</p>

その2；日月の反転

図-7のとおり山形市岩根沢石行寺境内の隣接地に村社「日吉神社」がある、神社は南面して立っている。同社正面に「村社 日吉神社」と刻された標柱兼石灯籠が南面してある。



図-7

分かり易く平面図化すると図-8のとおり——建物、石灯籠は地理的に真正に東西南北の向きに対応——のここにおいては、神社（祭神）本体から見て、「左上右下」、すなわち、^{さじょううげ}左側に日（太陽・日）、右側に（太陰・月）の配置ではなく、反対に彫刻されている。いわば、右上左下の配置とされている。これは何を意味しているのだろうか。

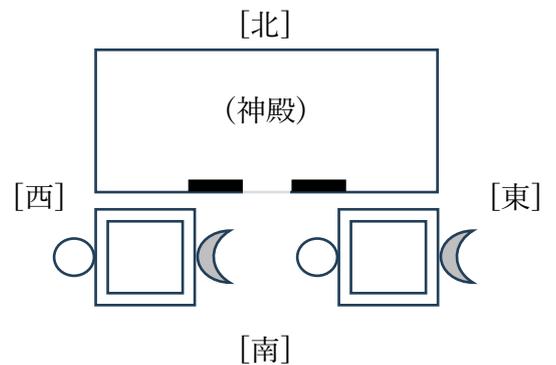


図-8

私の問題意識は、これは間違ったのか、あるいは古来の慣習であった^{さじょううげ}左上右下思想の認識がなかったのか、はたまた意図的なのかである。前者のことを言われると面白くないだろうから、善意を以って後者の意図的な行為と推し量ることにする、正当化するための助け船を差し上げよう。

図-9aは、出羽三山神社が保存するもので、羽黒山中興の祖天宥別当が書いた「逆さ般若心経」である。同図では分かり難いが、分かり易く活字化表示すると同図bのとおりである。逆に書いた意図は、魔除け・悪魔祓いのためと言う説明であった。

つまり、この日吉神社における献燈は魔除け・悪魔祓いの意図を以って建立したということではないだろうか。



図-9a

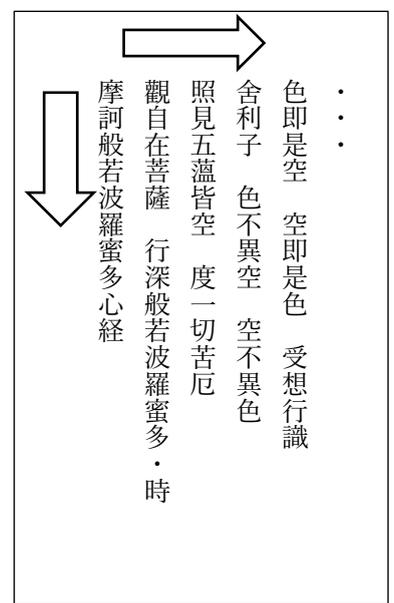


図-9b

表とか裏とか、前とか後とか、上とか下とかは相対的なもので、**視座、すなわち視点の軸の置き方、見方・判定する人間の立ち位置によって、真逆、反転してしまうことになる。**そういう相対関係は、陰陽二元思想が根底にある、陰と陽は対比的、両極的ではあるが、陰と陽の性質に優劣が生ずるものではない。陰陽二元は相対性・^{あいたい}相体制を特徴付けるための概念である。例えば、一方に表を当てれば、優劣付け難い他方に裏を当てたに過ぎないのである。「表」は明るい光、「裏」は暗い影という感覚的イメージ以って、とかく、前者は善・優・真であり、後者は悪・劣・偽であると決め付けたがるが、それが対立の根源となる。人間、私とあなたが向き合った瞬間に陰陽二元のどちらかに自動対応し、相対関係が自動成立するのである、あくまでも相対である、したがって、上記のとおり優劣・強弱が生ずることは絶対^{N o n}にないのである、ところが、俺が絶対に正しいと我を張るものだから必ずや衝突が生じ対立することとなる。人間の認識は、すなわち、世の中に存在するあらゆる言説は相対的なのである、よって、同じ「もの・こと」に対する評価であっても立ち位置（基軸のセット）によっては真逆の価値が表出し、脱出不可能な対立に進展する恐ろしさを秘めるのが常である、森羅万象なのである。

基本・原則から外れると問題であるとか、以上のような記述に触れると違和感を覚えるとか言いたくなるが、その基本・原則という物差し（評価基準）がそもそも人それぞれ千差万別であるからは、「もの・こと」の善悪の客観的評価は判定しようがないというのが現実・世の中における真理である。法治国家、法令主義といえども同様である。

前出、宇宙創成に係る老子の有名な一説、「道は一に始まるも、一にしては生ぜず。故に分かれて陰陽と為り、陰陽和合して万物を生ず。故に曰く、一（^{いつ}一）は二（陰陽）を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。」とある。言語による説明上、時間軸の先後を与えているが、二の陰陽において陰と陽に本質的な優劣・軽重を与えていない、また、一、二、三、四、五・・・は森羅万象「もの・こと」に対する数理を当てたものだが、優劣はないのだ、例えば、五は単独で有り得ず一があつたればこそ五の意味が生ず。反対に、一は単独では有り得ず五があつたればこそ一の意味が生ず、これは少し分かり難いが、仮に一だけしか存在しない（一だけ存在する）としたならば、二、三、四、五・・・は生じないし、それ自体を一という概念を与えなくとも由しとなる、よって五があるから一の概念が生まれるという認識に立つ。

すると、陰・陽二元の根源的意味合いは、人間の知識（智慧）の^ん分化発展の基点を象徴する陰・陽であって、その二つに優劣の差異・序列はないという前提がある。その陰陽に配当する上と下、左と右、前と後、表と裏、日と月に、東西南北に本来は優劣の差異・序列を与えた訳ではなかったのだが、文明の^ん進歩、^ん分化発展、意味分節が進む中で、概念化に何かと便利なように優劣の差異・序列を与えて来たということであろうと思っている。

(end)

密教・修験道の世界は陰陽二元とその調和を希求する精神世界である。生身人間の菩薩業における「行ずる」とは簡単に言うと「中・空」の境地を最終目標とする「心・言・行」の錬磨の実践であろう。中は中庸の中である。空は頑固な固定概念、しがらみ、執拗な執着心を解き放った自由な境地をいう。娑婆界人間の煩惱の根源は陰陽二元の分別知にある。陰陽二元の分別知界の弊害（対立・競争）を排除し、陰陽二元の分別知界の恩恵（吸引・統合）を渴望する蠢きは、人間のみならず、「生命・種子」を持つ動植物の基層にある性である。それらを承知の上で、陰陽二元の分別知界の対極する陰陽二元を噛み合わせて――安直に絡ませる・絡み合う、ではない――その調和（中・空）から新しい価値を生み出す智慧を欲求するものだ。それが神仏との交渉、「行ずる」へと強く結ばれていく。文字で記述しているが、無意識層の中で培われるこれもまた性である。そんな諸々を思う中で、本書に登場した『九十六丁』の「九十六」に係る背景を探ってみる。

1. 『九十六』の由緒譚

100丁とか、煩惱に纏わる108丁ではなく、なぜ、『96(九十六)』丁にした(為った)のだろうか。キーワードは六と九、 $96 \div 2 = 48$ 、 $48 \times 2 = 96$ にヒントがあると直感する、半分の48にも着目する。



図－1

(1) 祭祀現場に表れる「四十八と九十六」を関連書籍より抽出

□1. 片山正和著「出羽三山山伏の世界」(新人物往来社) P60・P98より。「・・・柴灯護摩は、『三の宿』移りの時に行う儀式である。図－1参照、ブナの丸太を三尺三寸の長さに切る。前後の切り口には、墨で三つ巴のマークを書く。これらの木を壇木というが、九十六本つくる。壇木を井桁にして九段に積み上げる。・・・この数

(九十六)は人間の骨の数と口伝えられている。つまり、この篝火は自分自身の手で仮装、葬礼を行う逆修葬儀の意味があるのだ。同書 P104-105、三鉦沢(三股沢)に向かうことになった。・・・ところどころに深い淵がある。岩場にしがみつくようにして越えてゆくのである。言い伝えによると、三鉦沢にたどり着くには、川を四十八回越えなくてはならぬ、という。・・・」 <往復で九十六回になる。>

□2. 戸川安章著『修験道と民族』より。「・・・そのような危険を冒してまで、なぜ、三鉦沢を目指すのだろうか。「三股(鉦)沢に詣でるのは、阿弥陀如来の四十八願に導かれて三途の川を越え、山中の他界におもむいて静かに甦りの時を待っている精霊を迎えるためである。・・・」

□3. 戸川安章著「修験道と民族」(民俗民芸双書) P84より。「・・・毎日の初夜と後夜に山上の鐘をつく。初夜は阿弥陀如来の四十八願を表じて四十八点、後夜は百八煩惱を打ち消すことを祈るために百八鐘をついた。初夜の四十八点鐘は、梵網經に説くところの十重四十八輕戒を思え、という意味も含まれていると説く先達もいる。同書 P210より、・・・四月八日の花の盛りははじめから、七月十四日の盛りおわりまで、ちょうど九十六日になり、「年中行事」の「宝前九拾六ノ花器エ花備エ初ル」とあるのと符合する。・・・」

□4. 戸川安章著「出羽修験の修行と生活」(佼成出版社)より。「・・・羽黒山の夏峰は、花供の峰と呼ばれ、ついでに四月八日は一山の総衆徒が大堂に出仕して阿迦井の水を汲み、九十六の花器に花を盛って御宝前に備え、・・・」
 <なお、4月8日はお釈迦様の誕生日である。また、出羽三山湯殿山は、大同2年(807年)4月8日に弘法大師空海が開山したとされている。>

□5. 大川廣海著「出羽三山の四季」(新人物往来社) P85より。「・・・近世、羽黒山頂の御本社に毎朝九十六の供物と燈明が献ぜられたのは、一座につき四十八の願いをこめた二座分、すなわち、月山と羽黒山への奉仕であったと思う。このことは月山と羽黒山が二山・一体であるという信仰の原点をも物がっているのである。・・・」

□6. 柳田国男著「日の昔」(角川ソフィア文庫) P74より。「・・・『太平記』の頃になると、京都の町の辻には四十八のかがり屋を置いたこともあって、その番兵たちが交代で火を守ると同時に、市内巡察の役目もしたので、・・・」

□7. 島津弘海・北村皆雄著「修験」(新宿書房) P335より。三股(鉦)沢は、川の流れを四十八回越えなければ、到達できないといわれる難所である。

□8. 湯殿山拜文(寺泉青木家文書)『長井市史』第二巻所収にある一節を取り上げる。その中に図(表)-2のとおり「川下四十八滝大明神」を読み上げる。

□9. 内藤正敏著「修験道の精神宇宙」(青弓社) P172より。「・・・湯殿山の奥の院では、(行者・道者は)四十八文の初穂料を納め、・・・」

ここまでで着目すべきは、□1～□7は羽黒側修験道に関するものであるが、□8・□9は湯殿側修験道に関するものである。共通して『四十八』を取り込んでいる。

(2)「九十六」に意味付け

何かの根本儀を引き出しその発展的応用の視点で、上記書籍の中に取り上げられているように「四十八」の二倍は「九十六」—— $48 \times 2 = 96$ ——になることへの意義付けであろうと考える。

その1；それではその「四十八」の由来は何か、阿弥陀如来と極楽浄土の世界を説いた浄土経典三部経の中の一つ無量寿経に書かれている無量寿仏(阿弥陀如来)の『四十八誓願』に由来する。仏に成るために修行中の身である法蔵菩薩が、その修行に先立って四十八の願いを誓い、実践・修行・成就を以って叶えたことで悟りを開き阿弥陀如来となったという。

その2；それでは「二」は何から来たのかである、これは今考察する。それは端的に、根源は人間の基層・無意識層に流れる自然原理は陰陽二元の二であると直覚する。それでは広げて二の意味合いを探ってみる。

□1. 仏教で説く「二世安楽」に由来する。『二世』とは、現世と来世、この世とあの世を意味し、安楽の願いは、現世にあっては心身が穏やかで満ち足りていること、来世の願いは極楽浄土に導かれることを意味する。

□2. 何か目標物・目的物としての「二座」「二つ」を対象にすることである。例えば、本道寺と湯殿山、本道寺と月山、月山と湯殿山の二座一対分への崇敬奉斎である。

・	大網	川下	北方	西方	南方	東方	烏川	・
・	注連	四十八	金剛	大威	軍荼	降三世	八大	・
・	掛深	滝	剛夜	徳夜	荼利夜	夜叉明王	金剛	・
・	山	大明神	夜叉明王	夜叉明王	夜叉明王	夜叉明王	剛虚子	・
・	権現							・
・	如来							・

図(表)-2

□ 3. 目標点に行って、目標点から帰って来る往復山岳抖擻（^{とそう}抖擻とは心身を浄化し雑念を払い、心を集中する行）の実践である。行って来いは一方向の2倍となる。往きを1、^{かえ}復りを1、合わせて2となる。

□ 4. 修験道は凝死（死んで）・再生（生き返る）という蘇りの行であるとされる、死生と生死はそれぞれが生と死の対を表裏一体とする。

□ 5. 人間の知識・知恵の獲得初源の原動力である陰陽二元の二に靈験を感じ取るからである。

その3；羽黒山伏の修行において、心身一如を目指す中で「九字之大事」の所作、および「六根清浄大祓」の唱えを実践するが、羽黒修験だけの占有特権ではなく、広く修験道では行なわれる。本道寺通りに係る先達もその九と六にフォーカス・抽出した。

その4；平素な見方からは次の二つが浮かぶ。

□ 1. 「四方八方」の四と八である。東・西・南・北の四方と、これに北東・北西・南東・南西の四つを加えた八つの方角を指す、直接的には全ての方向という意味ではあるが、あらゆる策や手段を尽くすこと、平等公平に気配り・目配りすることを強調する時に使う。「四方八方」を見渡すという一方的な視線（こちらからあちらへ）だけではだめで、「四方八方」からの恩恵に浴していること（あちらからこちらへ）に対する感謝の念を忘れてはならないとする、相互・往復の関係性を重視する観点から、四十八と二にフォーカス・抽出した、その結果として $48 \times 2 = 96$ とした。

□ 2. 「四苦八苦」のことである。「四苦」は、生・老・病・死の四つの苦しみ。「八苦」は、この四苦に愛別離苦（愛するものと別れる苦しみ）・^{おんぞうえく}怨憎会苦（憎むものと出会う苦しみ）・^{くふとくく}求不得苦（求めても得られない苦しみ）・^{ごおんじょうく}五陰盛苦（心身の苦痛）を加えたものの「四苦八苦」で、ありとあらゆる苦しみのことを言う。「四苦八苦」は逃れられないと嘆く（あちらからこちらへ）だけではだめで、だったら、真正面から向き合い一つの楽しみとする（こちらからあちらへ）考え方を持たなければならないとする、往復の関係性を重視する観点から、四十八と二にフォーカス・抽出し、その結果として $48 \times 2 = 96$ とした。

2. 『九十六』原初の由来

前記は「九と六」に纏わる現実的な側面であるが、切り口を抽象的な面に替えて考察する。『九十六』のそもそもの意味合いを探ることにする。

我が国における広義の神仏宗教・修験道、とりわけ、山岳信仰、陰陽道、山伏行、そして、民間信仰、民俗に係る精神は、日本古来の神祇信仰に中国・朝鮮由来の仏教や文化が融合し、日本独特の宗教・信仰を育てて来たという。冒頭標記の問題を解くには、地球創成に係る中国古典の少しを紐解く必要があり、意に留意しながらも平易な言葉で、結論的な要点を綴ることにする。分かり難い処は読み手各自の研鑽に期待する。以下、ここでは、固有の制約がある場合以外は、数字はあえて算用数字で表記する。

(1) 中国古典を元に「9・6」の原点

『九十六』を解明するためには、^{すう}数理を抑える必要がある。数理については、前出書籍の他にも、そして、インターネット上には数多の解説が記載されているが、本件に関係ありそうなものを選出して列挙する。その前に、数理に係る代表的な中国古典を取り上げる。陰陽五行説、老子（道教）、それらを複合・大成した^{えききょう}易経の思想・哲学が基層にあることに留意する。特に易は、大自然界の森羅万象を数理に還元

し、統一的原理を追及する思想・哲学である。以下、これらを簡略的に中国古典と称することにする。つまり、本件命題である、『九十六（9・6）』の数理の意味合いを探るに当っては、中国古典の初歩——陰陽五行説、老子（道教）、易経を心得ておく必要があると考える。

その1；基本のこと、図(表)－3参照のこと。

<p>老子には、「道は一に始まるも、一にしては生ぜず。故に分かれて陰陽と為り、陰陽和合して万物を生ず。故に曰く、一（一）は二（陰陽）を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰気を背負い陽気を胸に抱き、この二つを媒介する沖気によって調和を為している。」の記述がある。</p> <p>〔「天地の万物・森羅万象」が自然数的に徐々に増加して行くイメージが湧く。〕</p>
<p>易経には、「易に太極（一）あり、これ両儀（二）を生ず。両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ずる。」の記述がある。</p> <p>〔徹底した二累法になっており、2の累乗で爆発的に増加して行くイメージが湧く。〕</p>
<p>数理キーワードの簡単説明は次のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『一』または『太極』は、万物未発未分の状態、すなわち何もかもが“一つ（全一的）”になっている混沌・混然一体の状態をいう。無分別智の世界と照応する。 ・『二』または『両儀』は、分れた最小単位陰陽二元をいう。分別知の世界の起点に照応する。 ・『三』は、万物を生む基点の『三』、および空間的『天地人』の『三』、時間的「過去・現在・未来」の『三』をいう。 ・老子に四は記述されないが、三が万物を生む基点であるから、最初に生まれた万物は四となる。易経に三は記述されず『四象』の四に飛ぶが、累乗性の性格を与えたが故には、三は隠しているに過ぎない、空間軸の四方、時間軸の四季・四時と照応する。 <p>〔両者に共通するものは、『一』と『二』、それぞれから固有値を抽出すると『三』と『四』と見る。 ($2 \times 3 = 6 \dots 9$ の6、$2 \times 4 = 8 \dots 4$ の8)〕</p>
<p>図(表)－3</p>

その2；数の分類（切り口）には二通りある。図(表)－4aは、生み出す生数と、生み出された成数の分類である、生と成は、相対する原因と結果、すなわち陽陰と重ねている。同図(表)bは、天の数と、地の数の分類である、天と地は相対する陽陰と重ねている。

生数	※1 (へい)数	※2 成数	(へい)数	(※3)	天数 (奇数)	地数 (偶数)
1	(+5)	6	(+5)	11	1	2
2	(+5)	7	(+5)	12	3	4
3	(+5)	8	(+5)	13	5	6
4	(+5)	9	(+5)	14	7	8
5	(+5)	10	(+5)	15	9	10
陽		陰			陽	陰
図(表)－4 a					図(表)－4 b	

例えば、数「2」は、片や陽（生数）で、片や陰（地数・偶数）で矛盾するのではないかという見方にな

る。がしかし、陰陽二元、易経においては、これは矛盾ではなく当たり前なのであり、「陰中陽あり・陽中陰あり」の表し方の一面である。

※1；真ん中、接着剤、仲介役の意をいう。

※2；自然数の成数は、生数に、天地に共通な「へい数5」を加えたものという見方が出来る。逆に、成数から「へい数5」を差し引くと生数に戻る。

※3；溢数^{えいすう}10（二けたになった10は溢れた数と見做す）を払うと生数1～5に戻る。整数第1位の数字以外は無視する見方である。

(2)『六(6)』を聖数、^{ふじゅつ}巫術の数とする意義

その1；原初の空間意識、東西南北の4方に、上下を代表する天地の2方を加えた6方の6である。すなわち、東西2+南北2+天地2=向い合う空間壁2（相対の陰陽二元）×3（組み）=6であり、この6にフォーカス・抽出した。

その2；地球創成時の蠢きについては「天地人」三才と陰陽二元が交渉し、万物万象が生み出されるという考え方があって、2つの切り口がある、結果は同じ。なお、才とは「はじめ」あるいは「はたらき」の意味合いを持つ。

一つ目は、はじめ（始め・初め）に陰陽二元（2）があって、それぞれに天地人（3）が作用した。すなわち、 $2 \times 3 = 6$ 。

二つ目は、はじめ（始め・初め）に天地人（3）があって、それぞれに陰陽（2）が作用した。すなわち、 $3 \times 2 = 6$ 。

結果は同じものの6場面から多へと展開して行ったことを踏まえて6にフォーカス・抽出した。

その3；「一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。」における万物創成過程の原初を象徴するものとしての $1 \cdot 2 \cdot 3$ を抽出し、「 $1 \times 2 \times 3 = 6$ 、 $1 + 2 + 3 = 6$ 」のとおり、3までの自然数 $1 \cdot 2 \cdot 3$ を掛けても、足しても6が生まれる。その数自身を除く約数（1、2、3）の和が、その数自身と等しくなる自然数を完全数といい、6、28、496、8128・・・などであるが、6は最初の完全数である。現代数学的な表現では、前者は3の階乗（ $3 \times 2 \times 1$ ）、後者6は最初の完全数（自身の全ての約数1、2、3を加えると元の自分6に戻る）である。このようなことから6にフォーカス・抽出した。

その4；六根の6を抽出した。六根とは、仏教でいう「眼・耳・鼻・舌・身・意」の6つの感覚器官とその感じる力（作用）をいう、その感覚能力で得た識が悩みや迷い、苦しみの誘発材（器官）となる。行者・道者は山道においては、「六根清浄」・「^{ざんぎさんげ}慚愧懺悔六根罪障」と唱えながら奮い立って聖地・御秘所を目指した、心の清めの象徴として6にフォーカス・抽出した。

その5；人間は煩惱・執着の生む「六道輪廻」の世界で生老病死の不安と苦しみを抱えて生きる動物である。しかし、希望がない訳でない、六道の先には極楽浄土があるという。仏教、すなわち仏陀の教えとは、その苦しみの六道から抜け出す精進努力の実践を説いている。故人に対しては「六道輪廻」からの脱出祈願の供養（極楽浄土への^{いざな}誘い祈願）、生身の自分に対しては「六道輪廻」からの解脱の宣誓を込めた心の象徴としての『6』であろう。

その6；「三は万物を生ず」の3を測量技術の基本となる3角形に応用した——3角測量法は、紀元前6世紀の古代ギリシアまで遡る。整数だけで3平方の定理が成立する3辺比のグループのことを“ピタゴラス数”といい、最小数の組み合わせは「3対4対5」の3角形である。その面積の6（ $3 \times 4 \div 2$ ）は、周

囲長 12 (3 + 4 + 5) の半分であることから 6 にフォーカス・抽出した。

(3) 『九 (9)』を聖数、^{ふじゅつ}巫術の数とする意義

その 1 ; 9̇ は、天数、陽数、成数の究極の数であり、聖数そのものであることから 9 にフォーカス・抽出した。

その 2 ; 老子「一は二 (陰陽) を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」の三つの原初的聖数に加算 (老子性) と累乗 (易性) の操作を与えると「 $1^3 + 2^3 = 9$ 」となることから 9 にフォーカス・抽出した。

その 3 ; 空間構造において、^{四正}東西南北の 4 方位、北東・南東・南西・北西の 4 隅の計 8 方に、中央を加えた 9 方位の 9 であることから 9 にフォーカス・抽出した。

その 4 ; 図-5 はネット『ウィキペディア

(Wikipedia)』より拝借・引用した。

密教も関係している。図-5 a 胎蔵界曼荼羅は、大日如来 (1̇) を中心に置き、広がる八 (8̇) 枚の蓮の花弁に四如来と四菩薩に配置した仏 (中台八葉院) の 9̇ 尊で構成する。なお、中台八葉院 (蓮の花弁 8 枚状) の 8 は空間構造 8 方位の 8 がモチーフとなっている。同図 b 金剛界曼荼羅は、会と呼ばれる 9̇ 区画に仏を配置・構成する。曼荼羅は、金胎両界の一对を以ってこそその有意義で、9 尊と 9 区画から共通する 9 にフォーカス・抽出した。



図-5 a

図-5 b

(4) 「6 と 9・9 と 6」の合わせ技の意義

それでは、なぜ、「9 と 6 (6 と 9)」なのか？ 前記を踏まえて、以下、主なものを列挙し、再度、前記図(表)-4 を参照する。

その 1 ; ^{せいすう}生数に焦点する。1 ~ 5 (片手) までの ^{しょうすう}生数に着目する、[1, 2, 3, 4, 5] の中で、陽の奇数を合計すると $1 + 3 + 5 = 9$ 、陽が長じた数字である。また、陰の偶数を合計すると $2 + 4 = 6$ 、下記より陰が長じた数字である。陽の長と陰の長を並立すると「9 6」となり、陰陽調和の印として誠に縁起の良い組合せとなる。その差異は 3 である。ここから同価の視点で 9 と 6 にフォーカス・抽出した。

その 2 ; ^{せいすう}成数に焦点する。図(表)-6 参照のこと。易経の「易に太極あり、これ両儀を生ず。両儀は四象を生じ・・・」中の四象に重ねる。「6-7-8-9」(10 は溢数を払えば 1 に還元するので無視) をテーマとする。9̇ は最も大きい数、かつ奇数なので『老陽』とする。

	7	8	9
6			
↑			
(動数)	(静数)	(静数)	(動数)
老陰	小陽	小陰	老陽
[四 象]			
図(表)-6			

次に老陽対極の老陰を決めたいが、陰を示す偶数の中で最も大きい8が『老陰』とすべきではなかろうかと思うのは当然のこと。しかし、『老陰』は6とする。その理由は、易経においては、陽と陰では全く背反する性状を問題視することから、陽は進み、陰は退くという絶対定義があって、陽は7から9へ前進する、陰は8から6へ後退するとして設定する。また、このような状況において、6・9は動数で、7・8は静数と見る。よって、動を象徴する数理において、6を陰の極数（老陰）とし、9を陽の極数（老陽）と設定する。このように、易経の数理においては、陰の極数、すなわち陰の代名詞を6とし、陽の極数、すなわち陽の代名詞を9としていることから、9と6にフォーカス・抽出した。繰り返すが、陰の極数は8ではない処が肝である。

その3；宇宙の三要素たる天地人は3、2は最初の偶数（陰）、3は最初の奇数（陽）である。1は数学的には奇数であるが、太極相応（根本原理・絶対基準）であるから省く。

3（天地人）×2=6、3（天地人）×3=9であり、老陽、老陰に照応させて、9と6にフォーカス・抽出した。また、数字の大小の並びとしては、6<9であるが、逆修（預修）の考え方——逆も真なり！を以って、順序入れ替えにより、9と6にフォーカス・抽出した。

その4；天数と地数に焦点する。1は太極相応（根本原理・絶対基準）であるから省いて、天の数は3から始まり、地の数は2から始まる。純陽の乾卦☰は3陽にして、陽の数3（天数・奇数）を3倍すると9となり、純陰の坤卦☷は3陰にして、陰の数2（地数・偶数）を3倍すると6になる。ある対象（3と2）に同じ3爻を乗じて9と6が表れることから9と6にフォーカス・抽出した。

その5；図-7（ネット、Written by わかまつなおき より）を参照のこと。1から9までの数を1回ずつ使う3×3=9個の魔方陣は——縦・横・斜めのいずれの列についても3つの数字の和が15となる、この時の左右両側の数値並びを足すと1+5=6、また、中身を解くと9+6=15——を構成する。この柵に9星を配置して、陰・陽二元、五行（木・火・土・金・水）、十干（甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸）、十二支（子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥）を絡めて運勢や方位の吉凶占いに活用する。

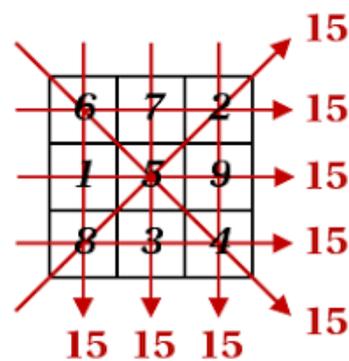


図-7

また、3×3の3は乾坤（陰陽）各3爻の3であり、かつ、3+3=6であることから9と6にフォーカス・抽出した。

その6；「6×9」はSix（シックス）・Nine（ナイン）という。勾玉が二つ合わさった形（図-8）にも見える。

その7；6～9（もう片手）までの成数に着目する。6は成数の初めの数で偶数は陰、9は成数の終り（10は桁上がりにつき無視）で奇数は陽である。初めと終り（両端）、偶数と奇数、陰と陽、見事に相対調和が取れている。6は陰中の極数となる。（成数中の陰は偶数の6と8の二つであるが、陰は負の領域で見ることがあり、絶対値の小さな方が実質は大きくなる。） また、9は全陽中の極数となる。



図-8

その8；二つを加減乗除すると図(表)-9のようになる。

加乗操作の結果15と54を見ると、位を合わせて（位を揃えて）それぞれを足し込むと、6と9のも

とに戻る。つまり、15と54というまったく異なる価値のものが出現したが、その裏にはきちんと生まれた時のDNAを持っているということになる。

(加)	$\overset{\cdot}{6} + \overset{\cdot}{9} = 15$	$1 + 5 = \overset{\cdot}{6}$	
(乗)	$\overset{\cdot}{6} \times \overset{\cdot}{9} = 54$	$5 + 4 = \overset{\cdot}{9}$	
		↓ ↓ ↓	
		6と9⇒15	1と5
(減)	$9 - 6 = 3$	$3 \div 2 = 1.5$	1と3と5
(除)	$9 \div 6 = 1.5$	$1.5 \times 2 = 3$	
	$3 + 1.5 = 4.5$	上の2は6と9の	
	$3 \times 1.5 = 4.5$	二つの意	
図(表) - 9			

その9；加減乗除に共通的に表れる $\overset{\cdot}{1}$ は太一（太極）の意、 $\overset{\cdot}{3}$ は万物を生むの『三』および『天地人』の『三』の意、 $\overset{\cdot}{5}$ はへい数（真ん中、接着剤、仲介役）の意をいう。

こう見ると、6と9に対して、数理における四つの基本操作で刺激するとこの3要素が表出する。なお、2は対極にある陰陽二元に対応するが、相違するもの、相対(待)関係にあるものの表現にも意図する。

このような関係に表れる数字の組み合わせは他にもあるだろうか。本当は数学を駆使すれば有無を証明出来るはずであるが、当方の頭脳は着いて行けない。したがって、そのような6と9の相性に魔物性・神秘性を感じて、9と6にフォーカス・抽出した。

その10；その他。 図-8にも見られるように6と9の形をそのまま水平にスライドすると、凹凸の合体となる。凹凸はすなわち陰陽・男女の合体と直接結び付く。まさに、子孫繁栄・五穀豊穰に直結する。それ故に、前段の数理解析に関係なく、深読みせず直感的に「九十六」丁としたのかもしれないが。

3. まとめ

前記のとおり、二つの聖数『六(6)』『九(9)』個別毎の原初の意味合いを踏まえて、『九十六(9と6)』の合わせ技が成立していたが、当時の三山参りの関係者——本件文政五年起点記念碑と丁石の発願主・世話人はもちろんのこと、旧月光山本道寺が起点の「高清水通り」故に本道寺宿坊集落の関係者も、上記数理の持つ広範な意義を総合的に理解した上で、共有を図った上で『九十六(9と6)』の数理(数値)表現に納得したということだろう。このような問題を考える時は、神仏混交全盛時代を想像する必要がある、今の価値観を以って、つまり、先入観・既成概念を以って、当時に当て嵌めようとしても解決の兆しは見えて来ない。そこで、前記、6と9の個別の数理特性、6と9の連関特性を踏まえ上で、統合的に要約するならば次のようになる。

- ・ 人間を含む森羅万象は、天地の間に存する人と共にその『天地人』3要素の交渉で生まれる。
- ・ 森羅万象・万物には、人間差配を超えた消長、栄枯盛衰、しょうじょう生々流転、輪廻転生の自然原理が作(せいせい)用しており、それらを象徴化すると『生・旺・墓』の3要素である。
- ・ 森羅万象には、それら盛衰の変化を認識するための基礎的な概念である『過去・現在・未来』の時

間3要素（三世）が滔々^{とうとう}と流れている。

- ・ 万物が存在為らしめる場は、前後（2要素）、左右（2要素）、上下（2要素）の三次元空間6要素を以って構成されている空間である。

$9 = 3 + 3 + 3$ であり、 $3 + 3 + 3 = \dot{9}$ である。すなわち、『天地人』の3要素、『生・旺・墓』の盛衰3要素、『過去・現在・未来』の時間3要素を足し込んだ $\dot{9}$ を象徴化して抽出した数理である。

$6 = 2 + 2 + 2$ であり、 $2 + 2 + 2 = \dot{6}$ である。すなわち、空間要素の前後（2）+左右（2）+上下（2）の各要素を足し込んだ $\dot{6}$ を象徴化して抽出した数理である。

つまり、人間の営み・生き様、そして、万物・万象の有り様を、象徴する、代表する数としての『九・9』と『六・6』に仮託したということであろう。

その『九と六』を祀ることによって、生老病死の苦悩から離れられない人生・命の儂^{はかな}さを思いつつも、他方で、空間意識からは五穀豊穡への思い、時間意識からは子孫繁栄への思いに希望を託した、ひいては、平穩無事と心の癒しを求めつつ、その成就の祈りを捧げる対象として、その成就の祈りを凝縮した証・印として、「高清水通り」入山口に『文政五年建立起点記念碑』を建立して、九十六丁（石）を置いたということではないだろうか。

命の儂^{はかな}さに思いを致すということは、裏返して、日日是好日、一日一日を大切に一所懸命生きる心構えを自ら諭す、克己奮励^{こっき}—克己復礼（自制して礼儀を守るようにすること）と刻苦勉勵（大変な苦勞をして、勉学に努め励むこと）を自らに誓うということである。

以上の全体状況に鑑みて、『九十六』にした、必然的に『九十六』なったということだろう。

<end>

第6巻－（4） 『三十六』の意味合い

第六巻－（3）に直結的に係る段である。まずは、西川町史編集資料第六号（志津文書）P20より図(表)－1に取り上げる。

「・・・ 一、高清水旧跡之事、昔奥州秀衡公之奥方為 _二 御参詣 _一 月山之獄下迄自ら運歩彼 _レ 為 _レ 成候 _ハ 申伝候。其印ニ _二 仙 _一 台 _二 塩釜 _一 六所明神之御神躰金佛ニ御 _レ 鑄立、高清水の路 _二 辺ニ _一 彼六所ヲ方取、一ヶ所 _二 六躰宛 _一 三十六躰六ヶ所 _二 立 _レ 置候。・・・」
・その置いた場所は <u>6個所</u> あって、各所に <u>6体ずつ</u> を安置したことは、 $6 \times 6 = 36$ の数理関係にある。
・「三十六」は「三と六、三六」「みろく」、「みろく」、弥勒菩薩の「弥勒」なのである。
・語呂合わせではあろうが、いや、たまたま、語呂合わせに叶うことになったが、後述するとおりに聖数として論理的意味合いを有するという。
図(表)－1

なお、現在の鹽竈神社HPには由緒には明確に出て来ないが、他所においては、「奥州塩竈六所大明神」を勧請したという神社は相応数がある。

果たして、「 $6 \times 6 = 36$ 」の意義は何か、その根拠は何に依拠しているのでしょうか？

1. 「三十六」の第一義的意味合い

（1）密教の金剛頂経に係ること

ネットサイト「仏教ウェブ入門講座」を参考にする。金剛頂経の「略述^{ゆが}金剛頂^{しゅうしょう}瑜伽^{しゅうしょう}伽^{しゅうしょう}分別^{しゅうしょう}聖位^{しゅうしょう}修^{しゅうしょう}證^{しゅうしょう}法門」(※金剛頂^{しゅうしょう}瑜伽^{しゅうしょう}經)に図(表)－2のとおりの一説がある。 ※；唐の不空（七〇五～七七四）が翻訳した密教經典で三卷からなり、『大日經』と並んで「兩部の大經」とされ、金剛界曼荼羅はこの經典に基づくものである。

自性及び受用と変化ならびに等流と、仏徳の三十六は皆自性身に同ず。法界身を合わせ總じて三十七を成ずるなり。
(漢文：自性及受用變化并等流 佛徳 ^三 十六皆同自性身 并法界身總成 ^三 十七也)
(解説)
これらの「法界身」が大日如来のことで、「法界」とは、大宇宙のことであり、大日如来は大宇宙そのもので、他の諸仏菩薩の中心とされる。大日如来が最高仏だという人は、実はこれらを根拠に、大日如来を最高の仏としているのである。
図(表)－2

「佛徳^三十六」であることから、最勝の衆生利益を目指す仏教徒としての修行体系の一環をなすと云われる三十六の徳目を列挙したものである。「成^三十七也」は金剛界三十七尊のことで、金剛五仏（4仏＋大日如来1仏）、四波羅蜜、十六大菩薩、八供養菩薩、四摂菩薩である。

$5 + 4 + 16 + 8 + 4 = 37 = \text{「}36 + 1 \text{ (大日如来)}\text{」}$ となる。大日如来自体を除くと36体であり、すなわち、36徳目は大日如来を除く36人の金剛界菩薩に課した修行徳目なのである。したがって、金剛頂経にあるこの段は、36 (三十六) が肝である。大日如来を教主とし、その指導の下に36の金剛界菩薩が36の徳目を修行・結願して如来に昇華したということであろう。大日如来はもちろん胎蔵界においても教主・中心如来であり、金胎両部界に君臨する最高仏である。

(2) 彌勒菩薩のこと

彌勒菩薩は、現在仏であるゴータマ・ブッダ (仏陀・釈迦牟尼仏) の次の仏となることが約束された菩薩 (修行者) で、仏陀入滅の「56億7千万年後」にこの世に現われて悟りを開き、多くの人々を救済するとされる未来仏である。一方で、高野山霊宝館HPによると、弘法大師は高野山の奥之院に入定される時、「われ、閉目ののちは兜率天とそつてんに往生し、彌勒慈尊の御前に仕え、五十億余年ののち、必ず慈尊とともに下生せん」と弟子達に遺言されたと伝えられている。この大師の誓願に従い、「弘法大師 (空海) = 彌勒菩薩」という信仰が浸透して来たのである。

彌勒^{みろく} ⇒ 彌勒^{3・6} ⇒ 「みろく」 ⇒ 「み・ろく」 ⇒ 「み・ろ・く」と発展的に敷衍して行く。さらには、「みろく」は「みつつのろく」であるから「666」とも表せる。後記するが「56億7千万年後」の「567」に「みろく (369・666)」が隠されていることが分かる。単なる発音の語呂合わせとも見えるが、実は、深い意味が隠されて繋がっていることが分かって来た。

(3) 数理から読み解く彌勒菩薩に係ること

その1 ; 「567」がなぜこの仲間入りなのか、徐々に説明していく。

以上のことから、「みろく」に纏わる数字として「①369」「②567」「③666」が表れた、これをここでは「みろく三数」と称する。中身の数字を加算すると次のとおりである。

		真ん中の「6」を基準とした左右の乖離			数字並びを加算	
		左側	基準	右側		
36	① 3 6 9	-3	0	+3	3 + 6 + 9 = 18	2 × 9 3 × 6
	② 5 6 7	-1	0	+1	5 + 6 + 7 = 18	
	③ 6 6 6	0	0	0	6 + 6 + 6 = 18	
図(表) - 3						

3つの数のそれぞれにおいて、並び数の合計がそれぞれ「18」になる。2 × 9²においては、陰陽二元を切り口とする展開であり、陽の極数9を相手とした。3 × 6³においては、天地人三才、あるいは、万物を生む基点数三³を切り口とする展開であり、みろく三数6を相手とした。3と6を並べては36「三十六」に戻ることになる。「みろく三数」は「みろく」の同質異体とも見られる。

必要相手とされた「9と6」の並びは「高清水通り」に連坦点在させた丁石数「九十六 (丁)」と一致するのである。

その2 ; 図(表) - 4 ~次に、別の切り口で「18」を得るためにその「6」を加算の仲介とし、「0 ~ 12」の13種類を絡ませると次のようになる。1 ~ 12はもちろん1年は12か月の月数である。その

時、その13種類「0～12」を行きと帰りを反転させている。つまり、1年の月数12と6を絡ませるとみごとに「18」が生まれたのである。

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18

図(表)－4

戻って『三十六』(3̇6̇)の数理を分解する。

√1 ; 36 = 3̇ × 6̇ × 2 = 18 × 2、「みろく」の36は自らの数字並び3と6と自然界原理数2の積で合成されたものである。

この場合の2は、「⁽¹⁾行きと⁽¹⁾帰りを反転、(作用と反作用の)合わせて2」に意味付けしたとおりの陰陽相対(待)二元の調和を意味する。逆に織り込み済であると理解してもよいのかもしれない。

√2 ; [12 × 3] = 36。12は1年 12か月の月数で、3は「天・地・人」の3であろう。

その3 ; 今命題の「36」について自然数加算から見る。1～nまでの一般式は $\frac{1}{2}n(n+1)$ である。1から36までの数字の加算合計値は $\frac{1}{2}n(n+1) = \frac{1}{2} \times 36 \times (36+1) = \frac{1}{2} \times 36 \times 37 = \frac{1}{2} \times 1332 = 666$ となる。1から36までの数字に0を加えて37個(0～36)の加算と見ることにもできる。ここにも面白いものが出現した。

√ 「36と37」は図(表)－2のとおり真言密教法界の菩薩数であり、大日如来を含めた仏達の数である。

√ 「666」は前頁のとおり弥勒菩薩の仮託である。強力な霊力を持つ「6」が3個並び、この3は「天・地・人」の3であろう。

√ 「1332」は宇宙創成初源「一は二(陰陽(二元))を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」の数字が表出したのである。

√ 「2」で除した結果がそのようになったが、帰一還元に至る中和化・中性化の自然作動が働いたということであろう。

その4 ; 図(表)－5～「みろく」3項の「①369」「②567」「③666」に真ん中で共通する「6」は次の特質を持っている。1から3までの自然数を足しても掛けても同じく「6」になる。

加算	$1 + 2 + 3 = 6 = 1 + 2 + 3$	中央の2が共通し、左右両端で1と3が共通する。
乗算1	$1 \times 2 \times 3 = 6 = 1 \times 2 \times 3$	
乗算2	$6 = 2 \times 3 = 6$	<p>○ 上の自然数の加算・乗算で左端の1(未発・混沌)を除く2(陰陽二元)と、3(躍動基点)の乗算となる。</p> <p>○ 自然数最初の偶数2(陰)と、1を除く最初の奇数3(陽)の積である。</p>
後記、図(表)－6より「1, 2, 3」の原初を辿れば宇宙創成原理と一致する。		
図(表)－5a		

大化操作 だいか 操作	(加)	$6 + 9 = 15$	(並び数の和) $1 + 5 = 6$		6 と 9 \Rightarrow 96 (増化の逆で並べる)	96 ∨ 36	3 と 6 と 9
	(乗)	$6 \times 9 = 54$	(並び数の和) $5 + 4 = 9$				
	小に大で操作 (価値の増化)		(上下の和) ↓ ↓ 6 と 9				
小化操作 しょうか 操作	(減)	$9 - 6 = 3$	$3 \times 2 = 6$	(6+3=9)	6 と 3 \Rightarrow 36 (減化の逆で並べる)	36 ∧ 96	
	(除)	$9 \div 6 = 1.5$	$1.5 \times 2 = 3$	[3・6・9]			
	大を小で操作 (価値の減除化)		陰陽二元の2で復元化				
図(表) - 5 b							

2. 寄進された「三十六体」の意味合い

その1；図(表) - 6 ~本節冒頭の三十六体の意味を探る前に、前置きとして中国往古よりの宇宙創成原理 (数理性自然原理) を取り上げておく。

老子 (道教等)	一は二 (陰陽) ^{二元} を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。
易経	易に太極あり、これ両儀 (陰陽) ^{二元} を生ず。両儀は四象 (四方) を生じ、四象は八 ^卦 (八方) を生ずる。
<ul style="list-style-type: none"> ✓ 「一、太極」は両者において同じ意味、何もかも混沌の太一のこと、すなわち「無分別智」の世界 (理想郷) を意味する。 ✓ 「二、両儀」は両者において同じ意味、陰陽相対(待)二元のこと、すなわち「分別知」世界 (現実の世) の諸元基点を意味する。 ✓ 老子の三は万物生成の基点に重点を置き、易経の四は万物被生成最初のものに重点を置いた見方である。 	
図(表) - 6	

36の数字組合せ (構成) は図(表) - 7のとおりであるが、A列について、図(表) - 6中の2・3・4が表出した、1は太極なので除かれたのであろう。[6×6]を採用した意味付けは次のとおりだろう。図(表) - 5 aの性格を有する6の相乗効果の発揮を意味し、6は成数かつ偶数であるがその相乗を以って、陽気—— (陰=マイナス) × (陰=マイナス) = (陽=プラス) ——の発動性「分化生成」発揮による運氣高揚の願いを込めたものであろう。

A	B	C	D
2	×	18	36
3	×	12	
4	×	9	
6	×	6	
図(表) - 7			

次にC列について、18・9・6については前記のとおりで、12について注釈するが、1年間の月数12か月の他に、薬師如来にも係ることから第六卷 - (5) に記述する。

「一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。」における万物創成過程の原初を象徴するものとしての $1 \cdot 2 \cdot 3$ を抽出して数理操作すると、「 $1 \times 2 \times 3 = 6$ 、 $1 + 2 + 3 = 6$ 」のとおり、3までの自然数 $1 \cdot 2 \cdot 3$ を掛けても、足しても6が生まれる。その数自身を除く約数の和が、その数自身と等しくなる自然数を完全数といい、6、28、496、8128・・・などであるが、6は最初の完全数である。現代数学的な表現では、前者は3の階乗、後者6は最初の完全数（自身の全ての約数1、2、3を加えると元の自分6に戻る）である。このようなことから6にフォーカス・抽出した。

その2；まとめ

真言密教・金剛頂経の「佛徳三十六」の修行を成就して、菩薩から如来にならんとする金剛界三十七尊（「成三十七也」）の裏において、弥勒菩薩が絡んでいた、弥勒菩薩を仕掛けていた、それらを企図していた、つまり、仏教の始祖仏陀の死後、その尊格と同等の仏に約束された弥勒菩薩（未来仏）とは表裏一体であるということである。すなわち、空海を始祖とする我が国真言密教の教主・最高仏「大日如来」は弥勒菩薩（未来仏の最高位）と表裏一体であると説かれているのである。

本通りとの係りにおいては、以上のように様々な要素・要因を踏まえた上で、今命題の藤原秀衡公の奥様が寄進・建立なされた『三十六道神』銅像の「36」については、「 6×6 、 4×9 」の二つの切り口はあったが、本通りへの係りにおいては、ご神体「六所明神」の「六」が肝であると「 6×6 」に特に着目し、合わせて36体を1個所に6体ずつの6個所に安置したということだろう。

なお、これまでの記述に関連する事柄について以下に取り上げる。

3. 三十六が出て来るシーン

その1；武田あきお暁明著「建築神殿論 心の御柱遍」（オモイカネブックス出版）を参考にする。伊勢神宮の建物構造に関し「・・・唯一神明造り」と呼ばれている。正殿の正面幅は、内宮が三丈六尺九寸、外宮が三丈三尺六寸（三は共通）・・・、いずれも『み・ろ・く』の数霊を示す数値を採用していると解釈できる。」出雲大社に関し「・・・正方形の本殿の寸法は三丈六尺で、心の御柱のサイズ直径1,100mm（1,090mm）＝三丈六尺、『み・ろ・く』である。・・・伊勢神宮同様・・・**仏教伝来以後に採用されたに違いない。**」という。

もちろん、それらの詳細や意味については極秘扱いである。こうなると、ただの語呂合わせでなく、信仰に結び付いているということは明白である。伊勢神宮について言えば、太陽神・皇祖神である祭神天照大御神を祀り、大日如来と重ねた神仏習合（平安後期以降）の時代もあったが、私には**伊勢神宮に「三・六」（弥勒菩薩）との繋がりがあるとは予想すら出来なかった。知った時に妙に嬉しさがこみあげて来た。**

その2；兵法三十六計、織田信長公三十六功臣、富嶽三十六景などが目に付く。大不動明王の眷族に三十六の童子があるとされている。

その3；内藤正敏著「修験道の精神宇宙」（青弓社）P149～P150に次の一節がある。

「湯殿山の『梵天加持』の時に、『湯殿山法楽』という独特の節回しの経文を中心にして、次のような経文・真言が唱えられる。・・・という具合に、合計三十六の神仏名を順に変えて読み上げてゆくのである。」

その4；広辞苑に「索一昼夜十二時の各時に一獣を配し、それぞれに二つずつ属獣がついた計三十六の鳥獣。占いに用いられ、また、仏教ではそれぞれの時に出現して修行者を悩ますという。」とあり、だから、悩まされないように畏れ崇め奉ったということだろう。日中12時間の各時に3（本体1＋属獣2）獣を配し、よって計 $12 \times 3 = 36$ 獣となる。

その5；全国に「三十六不動尊」霊場

東北三十六不動尊霊場、四国三十六不動霊場、近畿三十六不動尊霊場、関東三十六不動尊霊場など数多ある。

4. 煩悩108への発展性

その1；煩悩の数は108個あるということについては諸説あるとされるが、ネット等を参考に私設を整理してみる。

□1；六根（6）×好・悪・平（3）×浄・染（2）×過去・現在・未来（3）＝108になるという説。六根とは人に感覚を生じさせ、迷いを与えるもののことで、眼、耳、鼻、舌、身、意の六つを指す。好・悪・平は人間の感情のあり方、好＝快感、悪＝不快、平＝どちらでもないという表し方である。浄・染は浄＝きれい、染＝きたないという意味である。そして三世は、過去・現在・未来や前世・今世・来世を表す。

□2；次の説は、四苦八苦という言葉に由来しているという考え方である。

四苦（ 4×9 ）と八苦（ 8×9 ）を足した数が108になるという説。

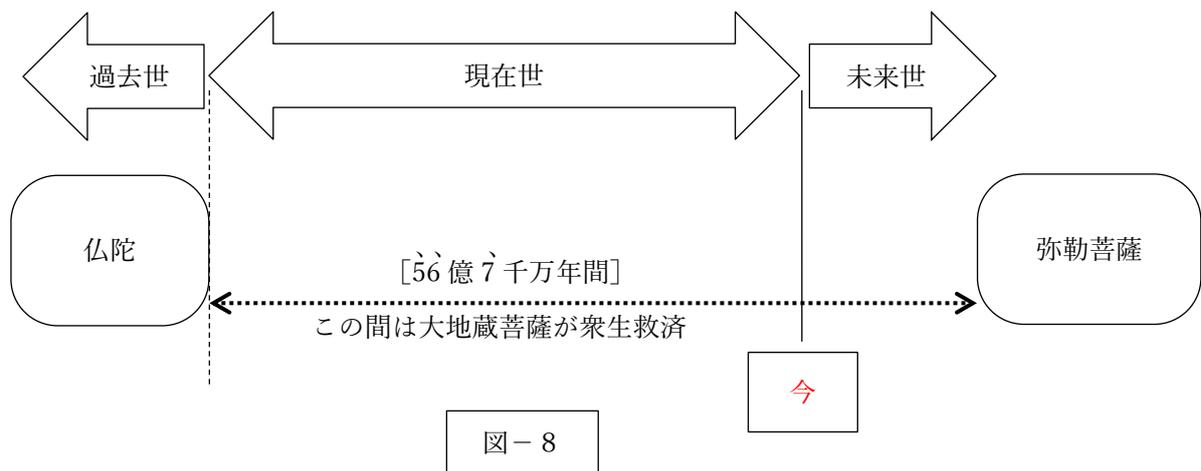
□3；また、気候や季節の変わり目を表す曆に由来し、月の数（12）＋二十四節気（24）＋七十二候（72）を足すと108になるという節である。月の数は1月～12月までのことである。二十四節気とは春夏秋冬をそれぞれ6つずつに分けたものであり、立春や秋分、夏至も二十四節気の一つである。七十二候とは、二十四節気をさらに細かく分けた曆で、中国の古い曆が日本に伝来し日本式になったものと云われている。

その2；108個あるとされる煩悩の中で特に人を苦しめるものが三つあって、貪・瞋・痴という「三毒」である。三毒解脱の、三毒退散の祈願を毎月^{とんじんち}の定例日に、普通、御経・真言を最低3回唱える処をさらに3倍の9回唱えることとし、年間では 9×12 ^{か月}＝108回唱えることになる。

その3；煩悩108を3で除すると、 $108 \div 3 = 「36」$ となる。この場合の3は、『天地人』の『三』の適用だと考える。天・地には、その天神地祇の神仏に対して、108中の72（ 36×2 ）^{天・地}分量の煩悩稀釈の加護をすぎり、残りの「36」分量は自らの修養を当てるということではなかったのか。

5. 高清水通りを包む深遠な世界

図-8のとおりで、仏陀の死後56億7千万年後に弥勒菩薩が引き継ぐが、その間は、大地蔵菩薩が衆生救済の任務を負うとなっている。現在世は時間的に幅があるように書いているが、現実の感覚はそうなのだろう、しかし、実際は今という瞬間しかないのである。



寄進された「三十六体」の銅像・金佛は、真言密教——36徳目、36菩薩・総37人／図(表)－1に係る場面においては、寄進者の奥州秀衡公之奥方を1人と見なして、 $36+1=37$ の数値と一致——とその教主「大日如来」×「弥勒菩薩」×「六所大明神」の深遠な教えを以って、高清水通りに係る人々の幸福、五穀豊穡、子孫繁栄の願いに叶えんとする綾取り網を投網・^{とあみ いじょう・いによ}圍繞したということだろう。弥勒菩薩と対面すれば“あなたの今の苦境の先には前途洋々が待っている、今の苦境にくじけるな、雨有れば晴れがある、月にも満ち欠けがあるように必ずや希望が訪れる、という激励メッセージを貰えんとする信仰支柱であったのだろう。

仏となった如来、その手前は修行中の菩薩などという仏教上の学問的定義はともかくとして、一般民衆、庶民目線からすれば、神仏混交、佛々混交、神々混交は当たり前であって、法華経でいう久遠実成無作の本佛、大日如来の尊格などに鑑みては、まさにシンクレティズム（諸教混交）世界観なのであり、単純化すれば「大日如来≒弘法大師（空海）≒弥勒菩薩」であると観念されていたのであろう。なお、「≒」同値、同価、同相意味である。

このような空間霊性は、真言宗と天台宗が混在した清川道にも及び「高・清フレンドリー古道」域全体に絡まったことなのだろう。

<end>

第6巻－(5) 「旧跡神躰明鏡」を成した聖数

西川町史編集資料第六号(志津文書) P20より図(表)－1に抜粋する。「高清水」の地(小屋跡)－今でいう元高清水は古来「旧跡神躰明鏡」と称し、特別の地として来たが、第六巻－(3) (4)を踏まえて、聖数との重層性を改めて考察する。仏教開祖は言うまでもなく悟りを開き真如の世界にいる根本仏の釈迦(仏陀・釈尊)である、その仏の世界から真理を以って人間救済に表れたのが如来であり、代表格は阿弥陀如来であり、釈迦如来であり、薬師如来である、密教においてはそれらを統合した大日如来である。

(七) 本道寺より寺社奉行所江口上書(C)

一、高清水旧跡之事、昔奥州秀衡公之奥方為_レ御参詣_ニ月山之獄下迄自ら運歩彼_レ為_レ成候_ニ申伝候。其印_ニ仙台塩釜六所明神之御神躰金佛_ニ御鑄立、高清水の路辺_ニ彼六所ヲ方取、一ヶ所_ニ六躰宛三十六躰六ヶ所_ニ立彼_レ置候。

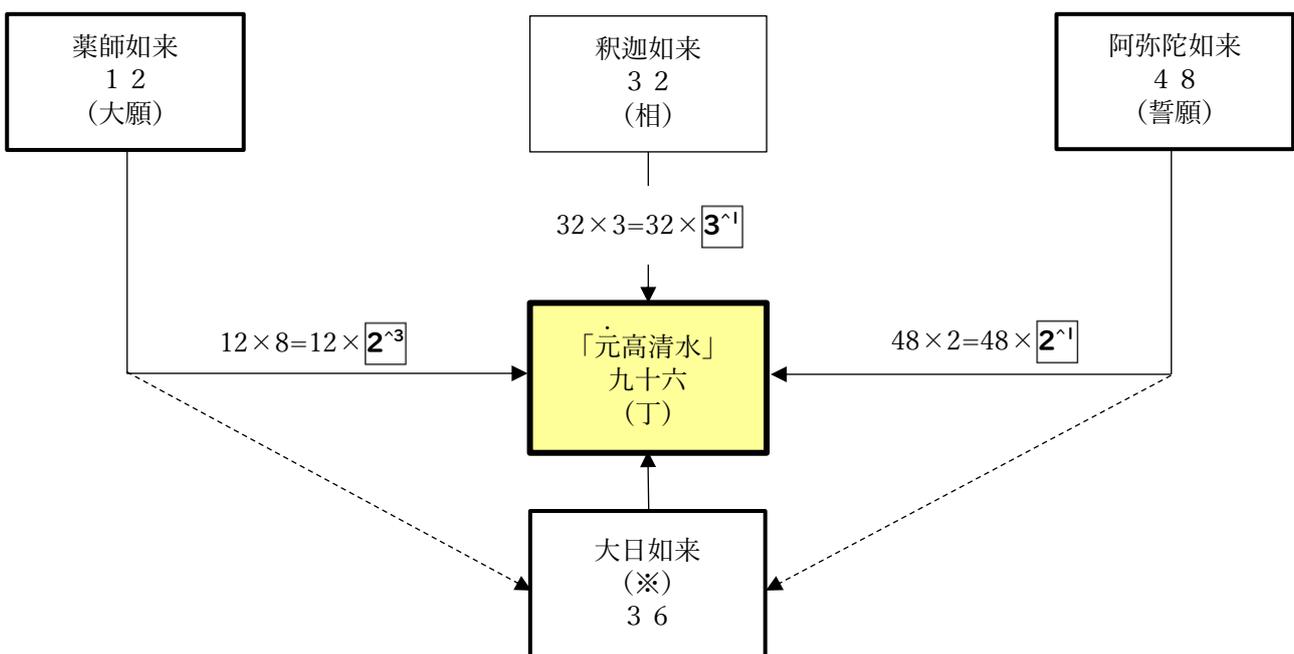
其旧跡神躰明鏡ニ御座候。其時之宿坊源養坊_ニ申候_ニ、旧院今_ニ御座候。然間此寺_ノ高清水道之普請等_ハ不_レ及_レ申、毎年六月上旬_ノ七月下旬迄、小屋ヲカケ家来_ニ登、本道寺_ノ之形・米・塩・味噌等_ハ改申候。如_レ此古来之由緒分明_ニ御座候事。・・・

天和三亥年五月

源養坊 宝蔵坊 本道寺 観海

図(表)－1

図－2を参照、釈迦の特徴は「三十二相・八十種好^{しゆごう}」と言われる。薬師如来は「十二の大願」を果たされ、阿弥陀如来は「四十八の誓願」を果たされて如来になられた、大日如来は「三十六徳目」を弟子に授け自らも果たされた。そこで「 $12 \times 8 = 32 \times 3 = 48 \times 2 = 96$ 」の相補相関性を探る。



図－2

※大日如来の意味合いは以下のとおり。

大日如来=弥勒菩薩

みろく=直接的；^{みろく}3 6

間接的；^{みろく}3 6 9

3 6 9
(+ 3) (+ 3)

(3 + 6)

3 6 ⇒ 3 & 6 → 3 + 6 = 9 → 3, 6, 9 → 3 6 9 (みろく=弥勒)

図-3、 2^1 (2の1乗) と 2^3 (2の3乗) と 3^1 (3の1乗) に表れた「1と2と3」は「一は二(陰陽)を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」の「一・二・三」のとおりである。1が2回、2が2回、3が2回、相互作用した、バランスが良く真に縁起も良い。なお、 $2^3=8$ は釈迦の「八十種好」の八でもある。

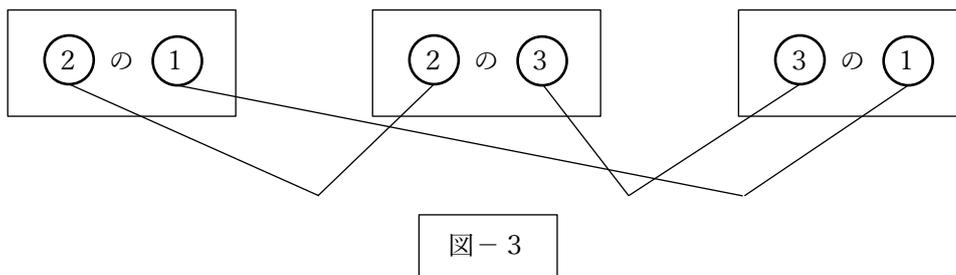


図-3

{369}は、 $\overset{\cdot}{3}$ (躍動基点) の万物を生む力を以って、 $\overset{\cdot}{6}$ と $\overset{\cdot}{9}$ が生まれた、これを娑婆世界に写すために、6と9を上下反転では9と6、左右反転でも同じとなる9と6に成らしめたのだ。

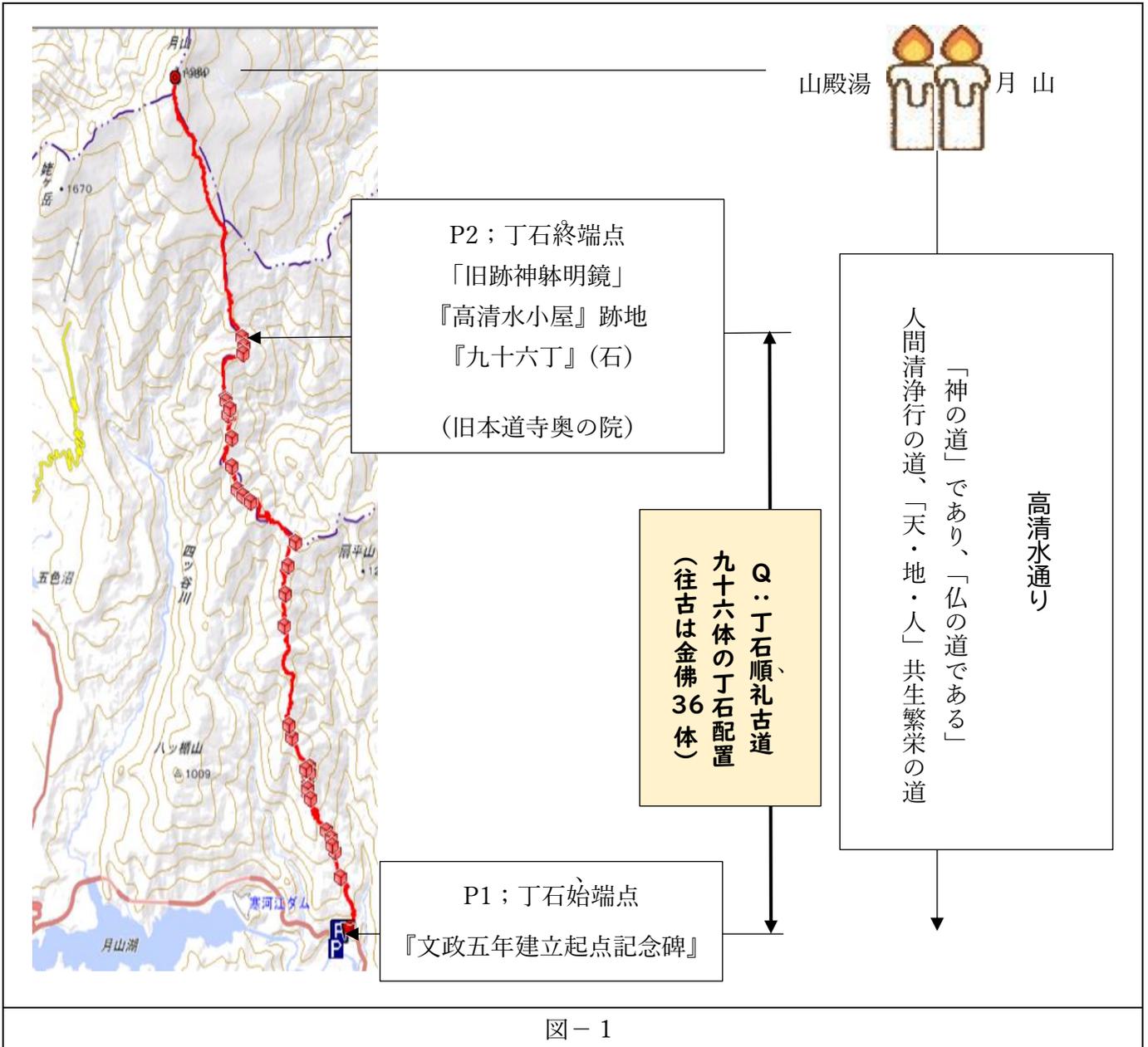
このように麓の大基点旧本道寺から「九十六」丁先の古来の「高清水」地は、「旧跡神躰明鏡」とされて来たとおりに聖性、特別の地であったのだ。

さて、このように数理分析と結び付けて考察したが、世の自称識者は必ずや“大沼の言うのは後付けの屁理屈だ、昔の人達はそんなややこしいことをいちいち持って来ない・・・”などとおっしゃるのが通例であろうと想像する。そうかもしれない、がしかし、“昔の人を馬鹿にしちゃいけない!”と思う。さらには、現代に戻して、月山を目指して「高・清フレンドリー古道」域に入った場合においては、単なるピークハント登山ではもったいないと思う、調査報告のとおりにあれだけの史跡が連坦的に点在している歴史の重みに鑑みて、往古の人達に思いを致し、今世の私達が楽しみながらの登山環境に仕上げたく創作したものである。いや、創作したのではなく、往古の人達の智慧に気付いた、気付かされたということである。

(end)

第6巻－（6） 「(弥勒仏)丁石順礼古道」の地形的因縁果

「高清水通り」には図－1のとおりP1とP2の間には約10.5kmに亘って九十六丁の里程標、距離の目印としての丁石が安置されている、それではなぜ、このルートが選ばれてこのような配置になったのだろうか、なぜ、この両地点が選ばれたのだろうかという素朴な疑問から入った問題意識の解明である。



さて、何らかの時代背景や事情があって、高清水通りにおける丁石寄進奉納事業が持ち上がった時、^(体)30丁とか、^(体)60丁とか、^(体)108丁でも良かったかもしれない、しかし、九十六丁にしたのだ！——成ったというのが正しい表現かもしれない、なぜ「九十六」丁だったのか。一番素朴な疑問は、月山まで約14km余りある高清水通りの中で、なぜに元高清水というその地点で、そこまでの区間なのかということである。

その数値に着目し検討した処、数理に裏打ちされた極めて高度な思考、綿密な企画と意図が込められていたということ突き止めた、第六巻－（3～5）にその突き止めた理由・背景をるる記述して来

た。ボンクラな私には到底及びも付かない、そしてきれいな理屈付けがなされたことを解明したと胸を張って記述した。しかしである、例えば、当時、「九十六」はとても大事な聖数であると机上で探り当てたとしても、「九十六」先が、その理屈に相応しいと場所とは限らない。そもそも「九十六」先と言っても基点（スタート基準地、起点）をどこに設定するのかという課題が出て来る。起点には基点と決定するに相応しい歴史的意義がなければならないはずである。

ここで我に返った。この全体地形を人間が意図的に人力を以って造成した訳ではない、と気付いた。

今世において解明した、探り当てたと謂えどもそれは後付けの理屈であることから人為である、人工的細工であると気付いた。すると、正しい答えは何なのかとなるが、いとも簡単なことである。

P1・丁石始端点／『(文政五年)起点記念碑』と
P2・丁石終端点／『高清水小屋』跡地／『九十六丁』(石)と
Q・その間に丁石を配置した道の

3点セットには、人為を許さない自然界の地勢的・霊的な必然性があったのである。

結論的に言えば、このような全体地形そのものは、当然であるが、地球創成時、天地初めて拓けし時に、日・月・星が住まう天がこの地を選定し、神仏を分身（降臨）させて写し込んだ自然造形であり、天地の胎動が生んだ必然である。人間が人工的細工を施して造った地形ではない^{N o n}ということをしつかり認識する必要があると分かった。

さて、このP1・P2・Qの3点セットを特別の空間と認識するに至った時間的経緯は次のとおりである。

{ 以下、往時にワープした気分で記述 }

旧本道寺は、西暦809（大同四）年8月8日に弘法大師こと空海によって開かれた。その後、しばらくして（まもなくして）、本通りが拓かれた。

月山・湯殿山参詣者の往来に伴い、後に丁石終端点となる『高清水小屋』跡地（今でいう『元高清水』）に現れた（宿る）次の特殊性に気付いた。

- ✓ 1；本通り山道の傾斜地勢において、P2点（以下「当地」という）より先は、背丈の低い樹木から灌木地帯に変化し、ここより先は月山頂上まで登り一辺倒の急坂となる。
- ✓ 2；当地が骨太尾根筋一直線山道中で最も幅が狭く、両側東西から二つの河川がわずか約35mを挟むように、その源流部が当地に迫って月山「大雪城」伏流水が湧出している。
- ✓ 3；当地の目前は地理学的に月山全体地形中の断崖絶壁（浸食壁・構造運動の影響）になっており、眼前（視野）に鉾山・鉾石・鉾脈・鉾床の露頭が現れている。（なお、鉾石は古来『神足』と称された。）

これらの地理的特徴の場所に鑑みて、高清水通りにおいて、当地は自然界の霊気漂う特別な空間域の一つと感得されて来た。

時代が進む中で、旧本道寺の関係者は、次のことにも気付いた。“このような霊気漂うセット空間は、今（この時）始まったことではなく、今、感じる事が初めではなく、いやいや、往古より、つまり、旧本道寺が開かれる以前から感得されて来たのではないか・・・”。

そうして、参詣者の往来が増加するほどに、そのような歴史の流れを踏まえて、1683（天和3）年時点で、当地を「旧跡」と称し「神躰明鏡」と形容し崇め祀り、本通りにおける聖地の一つ「本道寺奥の院」と通称していた当地 P2 が自然的に決まったのだ。文字に記したのはこの時代にしても、会話の中では古来この言葉が使われて来たのだ。

さらに時が過ぎ、長い往来の期間を経れば、旧本道寺から当地までの距離が気になるのは当然のこと、自ずと経験的に（概略測定したにしても）九十六丁前後の距離は分かって来た。このことも、道が拓かれて間もなく、古来、会話の中では認識されて来たはずだ。人間は自然界から霊気・霊力を貰うだけではなく、逆に、参詣行者の祈りの宗教的感覚を、神仏畏敬の精神をこの道に刷り込で来たのだ。

そして、いよいよ——1822(文政五)年の至近年前から——丁石奉納事業が持ち上がり、果たして、どこまで安置するのか、何体を安置するのか、始基点（起点）はどこにするのか、終基点をどこにするのか、・・・関係者が相談・協議した。

始基点（P1）の位置を詰めることになり、別記のとおり「道路原標打点地」「一つ目の聖俗結界（女人結界という意味ではない）」という歴史的必然性があった。結果してその（今の）位置に文政五年⁽¹⁸²²⁾に起点記念碑を建立した。

終基点（P2）を、古来「旧跡神躰明鏡」の地と伝承されて来た今で言う「元高清水」の地にするという希望は皆の直感であった。前記のとおり本道寺から当地迄の距離は九十六丁前後というのは自明の理であった。

時代の流れを重ねる中で「天地人」三位一体——神仏の霊性、自然界、人間が混然となって、三者が必然的結合(因縁果)を以ってこのような時空（時間と空間）が醸成されて来た。それらが人的交流の中で伝承されて来たのだ。例え地理・地形・地勢が地殻変動で先行した——自然造形と雖も、これだけの大事業をするからには、ち密な計算の上で考え抜いた末に、その実施目的・理由を明らかにするために、また、諸々のコストの必要性を説くために何らかの意義付けを図ったはずである。その意義付けは後付けであろうとも別記したとおりの数理聖性とも自然合致することになったのである。

このように人間が認識するに至ったことは、自然の生せる技を最大限尊重した結果である。

.....

始終両端の P1・P2 と区間Qの3点セットにおいて、どちらかの先後ではなく、天地が成した自然造形なのである。鶏が先か、卵が先かの堂々巡りで片付く話ではなく、偶然という軽薄な言葉では片付けられない、あるいは、本通りにおいては偶然も必然と裏腹紙一重であったということである。

以上の地勢的・霊性的特徴と相まって、人が本通り五大に宿る不思議な空間域と感得して来た P1・P2・Qの3点セットは、もう既に九十六丁（石）を安置すべきその目的に適う最も相応しい位置としても必然性が（運命的で）あったのだ。このような空間に気付いた、このような空間に目を付けて丁石を寄進奉納した当時の人達の鋭い感覚に驚く他はない。

(end)

第6巻－(7) 高野山^{ちやういし}の町石道

意味合いは同じながらも高清水通りの可愛らしい丁石とは違う大型の「町石」が連坦する高野山^{ちやういし}町石^{ちやういし}道は、道そのものがユネスコの世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産の一部として登録されており、弘法大師に纏わる参詣古道である。

以下は私の4回の四国へんろに係り、高野山の「町石道」——図-1において“起点を壇上伽藍とし慈尊院との間の参詣古道”をいう——を2回歩き通し時の私の記録を踏まえたものである。図-1aは2018(平成30)年/69歳/4月3日(水)～5月22日(火)中の高野山参りは5月17日(木)～5月21日(月)のトラックログ記録であり、図-1bは2024(令和6)年/75歳/4月9日(火)～6月12日(水)中の高野山参り往復は6月3日(月)～6月9日(日)のトラックログ記録である。この写真は私が撮影したものである。

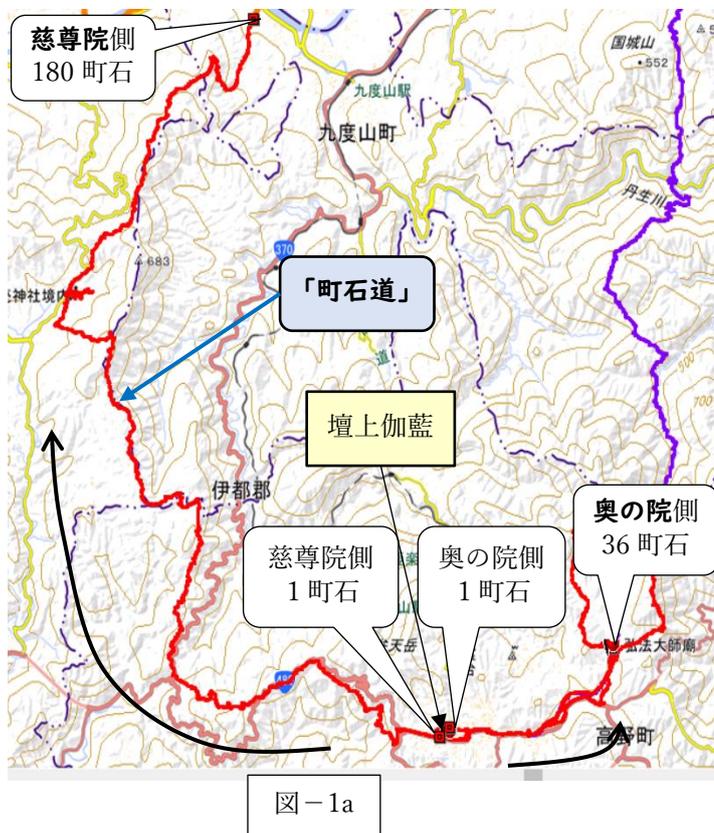


図-1a

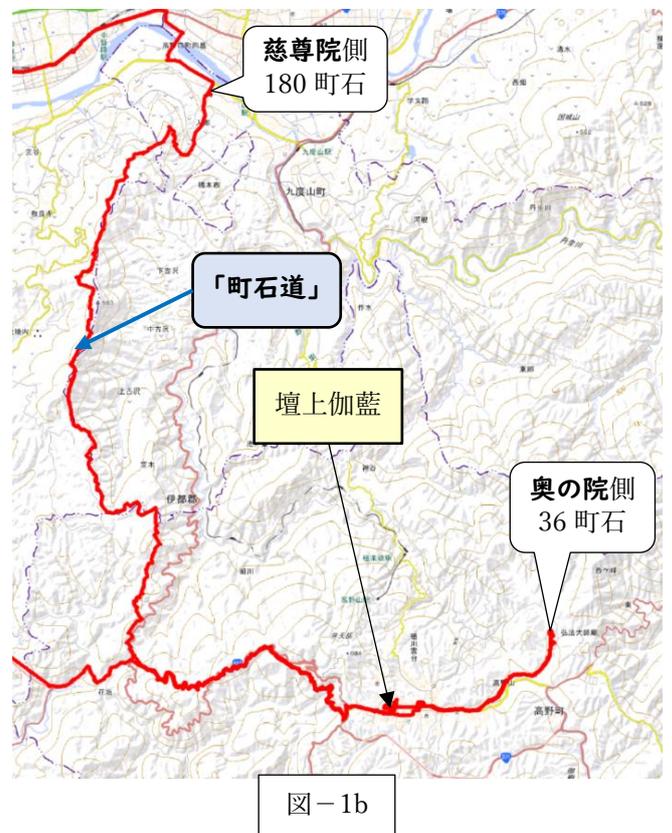


図-1b

高野山^{ちやういし}の「町石」とは、縦長方形の石柱に密教の仏尊を示す梵字と、距離・里程を表す町(丁)数、そして寄進者の願文を刻んだものをいう。壇上伽藍内を基点(0番)——根本大塔なのか、金堂なのか、その中間点なのかは不明?——として、慈尊院側と奥の院側の2方向に、すなわち、左右(東西)両北に全長約23km(うち高野山内4km)に渡って建立されている。なお、1町(丁)=109mである。

大きさの平均は、高さ約3メートル、幅30センチメートル、重量約750kgと謂われている。

1. 壇上伽藍内の町石

図-2は、壇上伽藍内にある慈尊院側の『1町石』と、奥の院側の『1町石』の状況である。



図-2

2. 慈尊院近くの町石

図-3は『町石道』^{ちょういしみち} 慈尊院側の最終『180町石』の状況である。



図-3

3. 奥の院内の町石

高野山奥の院側の最終『36町石』は図-4のと通りの弘法大師御廟前である。ここらは撮影禁止であるが、手前の『35町石』写真はこっそり撮影したものである。



図-4

奥の院
35町石

4. 「町石道」途中の町石 (図-5)



町石道の途中、標高 469m 地点
『慈尊院側 149 町石』



金剛峰寺手前、鐘の下
『奥の院側 4 町石』

図-5

(end)

1. 子供達の純真な感性

私は第3回目の「四国へんろ」――正味 2017(平成 29)年 4 月 4 日(火)～5 月 14 日(日) の 40 連泊 41 日間、22 日目 4 月 25 日(火)のこと、高知県大月町の月山神社手前の遍路道（山道）には、地元大月小学校の学童が描いた歩き遍路に対する激励メッセージが沢山木々にぶら下げられていた。

四国遍路は、四国 88 の寺院（札所と呼ぶお寺）を巡拝するが、図-1 のとおり、高橋さんの絵柄には、鳥居の形が大きく描かれている。この他に何人も同様の鳥居を描いていた。子供達のイメージとしては、巡拝の対象が神社という錯誤では無く、神様のような何か偉大なものを拝んでいるということだろう！ 子供達には、寺とか神社とかの区別は無く、とにかく何か神秘的で偉大なもの、というイメージだろう。寺のマークの卍を書いている人は誰もいなかった。

<p>図-1</p>	<p>図-2</p>

ここで、「陰陽二元」と「無分別智と分別知」の視点を持ち寄る、図-2 と組み合わせて見る。子供達が寺と神社の区別を意識しないということは、「寺院＝神社」という等式を成立させているのである。すなわち無分別智（禅でいう平等界と差別界が融合した理想境地、純粹無垢の精神世界）の世界により近いのである。子供達の感性に脱帽する、大人になってもこのような感性が大事であると思う。私自身、実際に寺の本殿と大師堂の前で読経している時に、寺であるという区別は特に意識はしない。私は本堂・大師堂の前で、無意識のうちに弾みで時々柏手を打った。時には「祓詞」を唱えた。

そもそも吾が国家、^{やまと・だいわ}大和民族には、元来神^{かみ・ほとけ}仏を区別しない大らかな善き習性が等しく備

わっているのだ。ここでいう大和民族^(※)とは、大和国家に対応した現在の奈良県や大阪府の地域を中心とした当時の地域住民のことではなく、本居宣長（江戸時代の国学者）が読んだ有名な和歌「敷島の大和心を人間はば 朝日に匂ふ山桜花」で表される日本民族を指す。

このような神仏混交の思想（シンクレティズム）を多様性、包容性、重層性、多層性等と表現されている。このような日本精神の基層に沁み込んだ思想を後押しする三つを取り上げる。

- ✓ 1 仏教は欽明天皇の時代、朝鮮半島の百済から朝廷に対し仏像・経論が贈られたことに始まる（538年説と552年説、前者が有力）が、八百万の神・天神地祇の信仰（アニミズム）に根差していた当時の人達は、「**仏は蕃神（あだしくにのかみ）**」と称し、**仏は外国の神**として理解したというのである。

二人の和歌を取り上げる、私の解釈で記述する。

- ✓ 2 西行——俗名は佐藤義清、鳥羽法皇に仕えた北面の武士、23歳の若さで出家した僧侶の身分で伊勢神宮を参拝し「**なにごとのおはしますかは知らねども かたじけなさに涙こぼるる**」と詠んだ。⇒ 祀っているのは天照大御神とかいい究極至高の神様であろうが、神様の序列・優劣に関心がある訳ではない、言語では表現できぬ至純の神々しさを感じる、私は仏教帰依（天台宗から真言宗へ？）の僧侶ではあるが、ここに来たら宗教宗派の何たるやは関係ない、ただただ有り難いという思いから手を合わせ首を垂れる、訳も無く涙がこぼれるのみなのだ。
- ✓ 3 貞明皇后（大正天皇の皇后）は「**キリストも釈迦も孔子も敬ひて 拝む神の道ぞたふとき**」と詠んだ。⇒ 日本人は外国から入って来たキリスト様・お釈迦様（仏）様・儒家聖賢の孔子様も客神と言って大事に受け入れ、仲良く共存共栄の世界を広めて来た。その違いを意に介せず皆を平らかに受け入れて来た精神は誠に大らかである。だから、家庭の中に神棚と仏壇を併存して祀り、子供が産まると神社のお宮参りに、キリスト教会で結婚式を挙げて、亡くなれば寺のお世話になる。当人のみならず親戚や知人・友人も礼儀を尽くして参列する。現世利益があるとかないとか、違いをことさら強調しない。日本人は全知全能のただ一つの神のみが存在する一神教世界ではないのだ。個性を持った八百万の神々と十方諸仏が仲良く暮らす国なのである。

そのような心中は、神・仏・キに区分けを入れていない、境界線を入れようがないのだという「阿頼耶識」からの疼きであり、私の思いとぴったり一致する、琴線に触れた思いがする。

他方で、想像するに、一部の僧職は“お寺と神社の混同は分かっておらん！”、一部の神職は“葬式仏教（葬儀事業）のお寺と、神聖な神社・鳥居と混同するのは学校の教育がなっとらん！”と偉そうにほざく『^{しっこくあほうじ}桎梏ア縫自』——足かせ・手かせの中で自分を袋状に縫っている状態、つまり、監獄個室に入って身動きが取れない状態、あるいは、『ネット包囲リング内一人相撲』——内鍵を掛けて、その鍵もどこに置いたのかすっかり失念状態、どちらにしても思考回路が金縛りになっている、しかも自縄自縛を認識出来ないでいる状況が見えて来る。

大月小学校の子供達に習い、これを教育の教材にすべきである。崇高な教職・聖職たる公僕の責務を忘れがちな教師の再教育素材にすべきである。はたまた、大人の生涯学習の素材にすべきである。

(end)

第6巻一（9） 石造文化財から学ぶこと

石に秘められた背景を探る記述である。全国各地の田舎（地方）から大都会までの路傍に佇む、あるいは寺社境内に見られる石造物（石碑・石塔・野仏、墓石等）は民衆の信仰の記念碑、かつ、祈念碑である。それ故に石造物は単なる石ころではなく、建立に至った人々の諸々の思い（過程）が詰まった、信仰対象の魂（靈魂）が宿っている神社（神様）・仏閣（仏様）を縮図化しているのである、まさに庶民の文化遺産である。それらの殆どには文字を彫刻し、建立に至った経緯の情報を発信している、時代や社会の様子を物語る、宗教（信仰）の深さが表れる、当時の技術水準や職人の技量を知ることができる。社会のコミュニティ（共同体結集力）や人の営みの可視化を図っているものである。

例えば、記念碑の切り口では信仰という思いの実践・実行の証拠・記録・開示である。本人の全額出費で、あるいは、講中の代参で目的地に行き来たことの参拝記念である。また、祈念碑の意味合いは、目的地に行くに行けない人達の行って見たいという願望を適えるものとなる。各地に無数にある写し霊場の存在に通底するものがあり、日常の身近な所で本場霊場と同等の御利益を授かりたい、本場の神通力加護を^(※)間接的に賜りたいという人間欲望（懇願）の表象化の一面でもある。（※）分霊・分社、勧請という意味合いを含むならば「直接的」となる。

私はこれらに対面した時、次のような問題意識が湧く。

造立の目的がどんな事だったのか、石に刻む文字を決め配置を考えた誰かがいたはず、大きな石を探し回った誰かがいたはず、運搬手段を考えて移動を指揮した誰かがいたはず、建設・建立を指揮した誰かがいたはず、運搬から建設まで労力を提供した誰かがいたはず、これらに必要として資金を拠出した誰かがいたはずである。建立の時は竣工式・除幕式等の式事、開眼供養などの入魂儀式（芯入れ）を挙行了たはずであろうから様子が浮かぶ。当時の地区住民の思いや習俗を垣間見る事が出来て、土着の「神・仏」に対する篤い信仰の足跡が読み取れる。石碑・石塔には願主あるいは施主の文字が必ずといっていいほど刻まれている。その役割分担、定義とは何なのかについてである。

願主とは、発願主のことであり、当該事業の意義・意思を立てる、建立の目的や趣旨・趣意の発願文を起草する主導者を指す。自らの菩提を願った施与という意味も含まれている。私は、その事業の立案・総合企画を担う総合プロデューサー、全体統括者を、つまり、全体・総体の取り纏め役を指したものと解釈している。

他方、施主とは、元々は梵語（仏教語）であり、僧団に金品を施し、僧団の維持に関与する人を称した、つまりは寺院に寄付をして維持する者を称したという。前記発願主の事業に係る意図・意向を汲んで賛同する意思表示として、寄付金・奉加金等の資金提供者をいう、あるいは寄付金集めの勧進活動（募金）活動を担ったものと解釈している。

願主が施主を兼ね、反対に施主が願主を兼ねている場合もあったろう。もちろん両者の協働（共同）もあったのだろう。個別の物を見ると、どちらか片方だけを刻した場合や、まったく刻されていないものが多々ある。

文字を彫刻した石工にも注目するが、彫刻されているのは本の一部である。なお、村山民俗学会員の市村幸夫さんによると、本願主・脇願主・世話人・後見人・立会人・施主・寄付人・助力人・講中・行者

など様々な名称が出て来る、とのことである。

次に、木村博・加藤和徳・市村幸夫著「信州石工 出羽路旅稼ぎ記（青娥書房発売）」の内容から図-1を紹介する、沢山の人達が協力していることが読み取れる、必ずしも信者、氏子とはき限らない多くの人達が助力したのだろう。



図-1

国土開発や風雪に耐えて今日に残っている事はまことに嬉しく思う。一つの地域の文化・歴史を凝縮した精神文化のランドマークと理解出来る。今の私達は、たかが「石（ころ）」ではなく、石に秘められた背景事情を想像しながら歴史を解凍し展開して行く楽しみの視点を持ちたいと思っている。石造文化財は地域の歴史教育の生きた素材である、また、大人の生涯学習の生きた素材である。

<end>

その1；前置きがあります。

- ① 時間と、記憶・記録のことです。まずは、自分自身に係る一切について、過去のことも、現在のことも、未来のことも、きれいに一直線上に並んでいる、それらが整然と記憶・記録されている、したがって、俺のことは俺がみな分かっていると思ってしまいます。ところが、あにはからんや、“有る・在る”と言えるのは今の一瞬だけです。この今も次の瞬間には過去域に消されて行きます。記憶時間に差があるというものの早晩消えて行きます。また、まだ来ぬ先のことをあれこれ想像するが、それも今この瞬間に思い浮かべていることであって、そのとおりに実現しない、その想念は一瞬に消えて行きます。「取り越し苦労」と謂われる所以です。つまり、今この瞬間の前後の時間帯は実存しないのです。そこで、記憶はあてにならないということは周知のとおりです。
 - ② 思想信条が異なる人間がこの地球上に80億人（大人は60億人）もいることです。一つの「もの・こと」に対する評価、一つの「もの・こと」から取り出す価値は最低60億通りもあります。ここに相対関係を持ち出して、優劣を競うとなれば評価・価値の基準ルールを設定する必要があり、これまた無数となります。どんな屁理屈を持って来ても人間に優劣を付けようがないのです。したがって、そのいかなる言説・論説も相対的であってたった一つの真理に的中することは有り得ません。
 - ③ 言語という意味分節は万事・万象の一部を切取って表すに過ぎません。ならば“文字による記録”の有意性・有効性が命題となります。文字にすると真実が伝わる、文字即ち真実と思うのは独善毒蛾・妄想です。文字は過去の真実の全てを網羅・列挙するものに成り得ません。例えば全て100%を映像に残したとしても、映像といえども、その中身の解説といえども真実の一部分です。要はどんな理屈を並べようが言語・文字は「もの・こと」全体・全部のあくまでも一部であります。
- この三つの前置きの結論は、

万事・万象の三世を100%完全復元・再現出来ない。
万事・万象の真偽のほどは五分五分である。
言語という意味分節は万事・万象の一部である。

であります。「評価前提三要素」と自称しています。三世とは過去・現在・未来を指す。この世のあらゆる情報は文字であれ、映像であれ、有限時間内の創作であり、牽強付会（けんきょうふかいごじつけ）のたぐい、極論的に言えば偽作の範疇であります。**これはお互い様です。**

現代の最先端技術の一つAIをとっても、一つの問いに対して、複数の回答を提示します。

どんな高尚な言語を数多並べようが一つしかない真実に絶対に到達出来ません。換言すれば、自説（持説・持論・自論）に我を張る必要はない、自説は一つの見方である、自説は一つの切り口であると謙虚になるべきであると自戒し自覚を促しています。したがって、私は他人がどのような手段を用いようが、その主張・意見に対しては否定しません。賛同出来ない場合は、自説はこうだ、と独り言を言う風にして馬耳東風で流します。

その2；歴史に係る書籍をあちこち斜め読みをしている処で、ペーパー上で論争・批判し合っているものに出くわしました。史料・書籍・文書・古文書があるとしてもそれらは過去のものであり、真実（本質・本体）の極々一部です。前記のとおり100%復元出来ない過去のことを論じ、意に沿わない相手を批判・否定し合うなどはどっちもどっちです。100%復元出来ないものに対する思想信条の闘いをやっても

永遠に決着が付くはずはなく、最後は恨み・つらみ・憎しみ、憎悪がそれぞれに蓄積するだけです、“いつか、仇を取ってやる！ みておれ！”となります。対決したいというのであれば、文句があるならば自らが舞台を作って衆目の目前において対面で議論することです。

自説を正当化するために現代文明社会・高度情報化社会のツール・ノウハウを都合よく使うのはお互い様です。異なる見解であれば、相手はどうであれ、納得する評価を授かりたいのであれば、他の60億人の見解を賜るべきです、しかし、その60億人の評価を現実的には受けようがないのです。ならば淡々粛々と持説を述べ、記述すればそれで済むことです、お互いに相違そのまま是認です。

対象は一つであれ、係る過去の「もの・こと」は言語で表現しきれない事実は大半であろう、逆に言うと、表現しきれない中に真実が隠れている可能性大であります。

一編の書付・書面があったにせよ、加えた人為的論説は、今というこの瞬間の現実から見て、必要とする知識（局部的・限定的な言語情報）を絡ませて敷衍・推論・想像しているに過ぎません、したがって、少なくとも60億人の万民が認める客観的な価値基準の設定がない以上、一つの「もの・こと」に対して無数の論評・論考が生ずることはやむを得ません。本件調査報告書も当然この範疇にあります。

そのような蒙昧に陥る学者は、知識に溺れた頭でっかちの単なる知の詰め屋なのです、独善を振り回しているに過ぎません、尊敬にまったく値しません。

その3；例えば歴史について謂えば、遺跡の新発見や古文書の発見が話題となり、従来の通説・俗説を覆すような新しい見解・論評が生まれることは一般的であります。

例えば仏教について謂えば、元は釈尊（仏陀）一人のことなのに、後世、様々な仏典が、様々な仏様が登場します。

例えば神道について謂えば、元は教義・経典がないのに、様々な神様が登場します。古事記・日本書紀に登場する神々は一部です。

そもそも世の「もの・こと」は虚実入り混じっています。それらみんな「もの・こと」の真実の全てを尽くしたのではなく、後世の人間が勝手に後付けした論評です、それらを誰が否定出来ようか？ 否定のしようがありません。否定に値する客観的論拠があると言うならば、100%完全復元してからの物種となります。みんなお互い様です。〇〇学会で発表したからといって、その内容も歴史の時間軸上の通過点・一打点に過ぎません。

その4；本件調査報告書においては、最新の国土地理院地形図（電子国土）とGPS機器・当該ソフト（アプリ）を使用して考察した処を随所に書き込みました。過去のこと、神仏信仰のある面を考察するに当って、現代の科学技術の目線で論ずるのは間違いだという見方があるかもしれませんが、往古の文明レベルが現代と同じか否かという是非を問うことではなく、今のここでの論考・言説を今の目線で自己検証するための手法ということです。しかも、最新デジタル技術を駆使した歴史の再評価は当たり前前の時代です。なにも歴史に限ったことではありません。これは時代の進化、文明の進歩というものです。

その5；本件調査報告書は以上のような考え方を抱きつつ素人が作成したものであり、歴史好きで山登りが好きな仲間達が、昔から歩き続けられて来た古道に埋もれ気付かれなかった史蹟等の調査を通して、現場で感じたことを考察し、庶民目線から綴ったものであります。高尚・高邁を自認する学者・研究者各位の歴史感に対抗するものではないことを明記しておきます。

その上で、取り纏めたものであります。

したがって、史実に忠実性を欠いている処があるかもしれません。あるいは、精緻の追及が甘く間違い

もあるかもしれません。はたまた現実離れした突拍子もない滑稽な処もあるはずです。学問的に難解な解釈に深入りする能力はなく、あくまでも、現場・現地に立つ者の視点で得た「高・清フレンドリー古道」域の物語性を重視して作成しました。したがって、読み手が、科学的根拠、学問的論証に照らして間違いだ・正確ではないとする記述に触れた場合は、あるいは分かり難い処は、各自の頭脳明晰・才賢を以って、ご自身の高邁な知識と研鑽を以ってご自由に解釈してください。こちらに不備・過誤を指摘されても如何ともし難くどうしようもありません・・・。

.....

私は75年の人生で、何かに付けて、頭から「①出来ない、②無理だ、③やったことない」（醜態三美言と称している）を吐く人を見て来ました。自らに湧いて来る問題意識に対して従順であれば必ずや追及行動が自発します。ところが、自分に自分が嘘をついて従順になれないのも人間の一面です、自噴した問題意識の解決に向かおうと自己内対面が出来ない臆病な一面もあります。また、自分の意に沿わない相手意見に対して、馬耳東風ならまだしも、“それは違う”などと否定する人が多々おります。そう言う人は自らに区切りを入れて限定化している姿ですから、人生もつたいないと思っています。自己包囲ネットリングを自ら造って、自らその中に入って、自ら内鍵を掛けて、独り相撲を取って藻掻いているようなものです。計り知れない自分の可能性・創造性を切り刻んで仕切りを入れてバラバラにしているようなものです。もちろん、本人は意図せずのことで気が付きません。

本件で言えば、例えば、頭から“この石碑に何も書かれている訳がない”と否定的な心を発した途端に、意味分節の境界壁が立って思考障害の状態に陥ってしまうのです。一見何も書かれてなそうであるが、“ひょっとすると書かれているかもしれない、書かれているはずだ”と、なぜ肯定的に思わないのか、そのように思って確かめる行動を起こさなかったのでしょうか??

地元で生まれた人の中には本通りのことは全てを知り尽くしていると内心豪語している人が複数いるでしょうが、その人達はなぜ自ら追求しなかったのかという私の素朴な疑問があります、羨望の眼を直感します。しかし、私達は、立ち入ってから1年少々で、先行した高清水通りの調査を終え、引き続き清川道に取組み、僅か2年余りでこのような調査報告に至ったことに自負があります。そんなこともあって、調査報告書には発見者と発見年月日を自慢げに明記しています、記録重視の意図からです。「発見」と記述した処は実際に地中下に半分以上、あるいは全部が埋まっていた現実を踏まえたものであります。

最後に、本件取組みにおいて学んだことの一面です。 史跡に係る知識を得たことではありません、物知りになったことではありません。 昨今の多様性社会と叫ばれる時代にあっては、“健全な多重人格”が必要とも言われている中で、自らを押し込めている四角四面のネット包囲リングを壊せという訓え、そして、何よりも対人関係にあっては対等互啓（恵）を強く意識する必要性を学んだことを嬉しく思っています。 ありがとうございます。

<end>